

社会主義ベトナムにおけるフォークロアの収集・研究と文化政策

大 泉 さやか*

Collection and Study of Folklore in Relation to Cultural Policy in Socialist Vietnam

OIZUMI Sayaka*

Abstract

This study investigates how the collection and study of folklore in socialist Vietnam contributed to the Communist Party of Vietnam's and the government's cultural policy. It focuses on the Sino-Vietnamese terminology used in the folklore studies of socialist Vietnam and explains their changes in relation to cultural policy. From the end of the 1950s, the collection of folk literature (*van hoc dan gian*) was promoted in provincial areas because of the Party's mass cultural policy. There, both politicians and scholars recognized that the collection of folk literature could not be separated from the collection of folk arts. This led them to introduce the term *van nghe dan gian* (VNgDG), a phrase that combines the terms for folk literature and folk arts, to reorganize the collection. In the late 1970s, the Party strengthened its control over the cultural sphere to abolish traces of the "old regimes." It thought that VNgDG contained many "old" elements that needed to be modified into more appropriate ones. And as China-Vietnam relations critically worsened at the end of the 1970s, VNgDG was finally criticized as being of "no use" because of its Chinese-oriented content and methodology. On the other hand, scholars had to highlight the tradition of "Vietnamese culture" in order to confront the "long-lasting Chinese culture," which led them to approach folklore from a historical perspective. At the same time, some scholars commented that VNgDG had become too "socialized" and emphasized the importance of scientific research on folklore. Consequently, they began to use the new term *van hoa dan gian* (VHDG), which literally means folk culture, to rejuvenate folklore studies. Currently, after the Law of Cultural Heritage was issued in 2001, the popularization of the concept of "intangible cultural heritage" (*di san van hoa phi vat the*) has made the status of the term "VHDG" unstable.

Keywords: folklore, cultural policy, socialist Vietnam, *van hoc dan gian*, *van nghe dan gian*, *van hoa dan gian*

キーワード：フォークロア，文化政策，社会主義ベトナム，民間文学，民間文芸，民間文化

* 一橋大学大学院言語社会研究科 ; Graduate School of Language and Society, Hitotsubashi University,
2-1 Naka, Kunitachi, Tokyo 186-8601, Japan
e-mail: ld081003@g.hit-u.ac.jp

I は じ め に

本稿では、社会主義ベトナム¹⁾において、フォークロアが時期ごとの文化政策といかに関わって収集、研究されてきたのかを、「フォークロア (folklore)」にほぼ相当すると見なされた漢越語 (ベトナム語の漢語系語彙) の変遷に注目して考察する。

社会主義ベトナムの成立当初、フォークロアは、「大衆性」と「民族性」を持つもの、すなわち労働者が伝えてきた「ベトナムらしさ」の象徴として政策的関心が持たれた。²⁾ 例えば、1948 年の第 2 回文化会議では、ベトミン指導部 (当時) のチュオン・チン (Trương Chinh) が、「マルクス主義とベトナム文化」と題する報告を行い、そこで諺や慣用語、歌謡、昔話、農民画などにより伝承されてきた人民文化 (văn hoá nhân dân) の研究の必要性を訴えた [Trương Chinh 1985: 71]。これに応じて始まったフォークロアの収集と研究が政治的使命を帯びたものであることは、携わる研究者自身が繰り返し表明してきた通りである (例えば [Đinh Gia Khánh 1991: 10])。³⁾ 自らを「文化文芸戦線の戦士」と表現した研究者もいたように [Trần Quang Nhật 1976: 77], 収集と研究は、社会主義にふさわしい「ベトナム文化」の建設を目指す、文化政策に寄与するものとして行われてきた。

社会主義ベトナムでは、1950 年代半ば、昔話や諺、民謡 (の歌詞) などが民間文学 (văn học dân gian) として研究されるようになった。1960 年代半ばには、民間の文学と芸術を合わせた用語として民間文芸 (văn nghệ dân gian) が導入され、その収集が活発化した。その後 1970 年代末以降、民間文化 (văn hoá dân gian) という新たな用語を用いて研究が行われるようになった。

本稿では、便宜的に、この民間文学、民間文芸、民間文化の収集と研究をまとめて、フォークロアの収集と研究と呼ぶ。ベトナム語では「民俗学 (dân tục học)」 「民俗 (dân tục)」 という漢越語は一般に用いられていない。本稿でもベトナムに関して論じる際には、漢越語の差異に注目するため、「民俗学」「民俗」という表現を使用しない。これ以外に、社会主義ベトナム

1) 本稿では、1945 年に独立が宣言されたベトナム民主共和国 (Việt Nam Dân Chủ Cộng Hòa) と南北統一後のベトナム社会主義共和国 (Cộng Hoà Xã Hội Chủ Nghĩa Việt Nam, 1976 年～) を、社会主義ベトナムと総称する。南北統一前の南ベトナムにおけるフォークロアの収集と研究に関しては、本稿の対象とはせず、その検討は今後の課題としたい。

2) 社会主義ベトナムにおける文化政策の基本方針として長年参照され続けた 1943 年の「文化大綱 (Đề cương Văn hoá)」では、文化の「民族化 (『ベトナム文化』の独立)」「大衆化 (プロレタリアート化)」「科学化 (マルクス主義化)」が掲げられた [今井 2002: 89-90]。フォークロアはこの精神に合致するものとして注目された。

3) アメリカなど「民俗学」の政治性に関する指摘はかねてより行われてきたが [岩竹 1996: 9], 社会主義ベトナムの場合、その政治性を自明の前提として、収集と研究が行われていたといえる。

では、「国際的に一般的に用いられている用語（『thuật ngữ quốc tế』など）」として「folklore」（以下括弧付きの「フォークロア」と表記）⁴⁾をそのままローマ字で表記することがあり、これは概ね学問名ではなく、収集と研究の対象を指して使われている。用語として登場した時点で「フォークロア」との対応が明確に語られていたのは、民間文芸と民間文化である。⁵⁾ 民間文学については、1950年代当時、一部では民間文学を「フォークロア」と同義に扱う研究者もいたが、方法論として文学研究の側面が強かったという [Viện Văn hoá dân gian 1990: 32-33]。現在のベトナムでは、この民間文学も含め、民間文芸、そして民間文化という「民間」を冠した漢越語の変遷が、すなわちベトナムにおける「フォークロア」概念の変遷として語られている（例えば [ibid.: 32-34]）。

そして、この用語の移ろいが振り返られるときには、対象をより総合的に把握する必要性から、文学から文芸（văn nghệ、文学芸術を合わせた広義の文芸）へ、さらに文化へと取り扱う範囲が拡大されたと説明されることが多く、それは研究の発展の結果として提示される傾向がある（例えば [Trịnh Đình Niên 1992: 71-74]）。民間文学、民間文芸、民間文化がそれぞれ何を含むものとして理解されているか、1990年代半ばの資料をもとにまとめると次のようになる。

- ① 民間文学：神話、昔話、笑い話、カーザオ（ca dao、歌謡）、長歌、叙事詩、詩吟、詩、民謡（の歌詞）⁶⁾ など [Vũ Ngọc Khánh 1995: 186-187]。
- ② 民間文芸：①に加え、（民間の）音楽、舞踊、漫談、舞台、絵画、彫刻、建築、装飾など。
- ③ 民間文化：（狭義）②に加え、習慣や風俗と関わる文化活動、祭礼、日常生活での事象

4) 社会主義ベトナムにおける「フォークロア」は、固定的な定義があったのではなく、民間文芸が「フォークロア」に相当すると見なされた時期には、民間文芸が指し示す内容を指し、民間文化が「フォークロア」に相当すると見なされた時期には、「フォークロア」は民間文化が指し示す内容を指していたと捉えられる。

5) 英語の「folklore」は、もともと1846年、イギリスの考古学者トムズ（William John Thoms）が学術用語として使用し、「民衆（common people）」の中に現存する伝統的信仰、伝説、古来の風習、生活様式、習俗、宗教儀礼、迷信、民謡、諺などを内容としていた [子安 2005: 21, 23]。この「folklore」に相当する用語として、例えばドイツ語では「フォルクスカンデ（Volkskunde）」、ロシア語では「フォリクロール（фольклор）」、日本語では柳田國男らが導入した「民俗（学）」を使用している。しかし用語が指し示す範囲やその収集や研究の目的や方法論は一樣ではないことが知られている。例えばドイツ語の「フォルクスカンデ」は、「folklore」より広く、物質文化を含む庶民（民族）の生活全般を対象としていた。その研究も、近代国家の完成が遅れたドイツでは、国民の統一のため一国民俗学の傾向を強め、先に一国の統一を完成させていたイギリスの「folklore」における、諸民族の資料を比較する手法とは異なる道を歩んだとされる [同上書: 24]。

6) 本稿では「dân ca」を民謡と訳す。「dân ca」は、（民間に伝わる歌謡の）旋律、歌詞の全てを指し、詩吟のように朗誦されるもの、伴奏を伴うもの、儀礼や娯楽の中で踊りなどの動作を伴うものがあるとされる [Vũ Ngọc Khánh and Phạm Minh Thảo 2005: 265-266]。民間文学では、民謡のうち旋律や伴う動作を除いた歌詞の部分が対象とされる。

や使用するモノなど。

(広義) 生産技術, 道徳, 世界観や人生観など民衆 (dân chúng) の物質文化と精神文化全てを含む [Đinh Gia Khánh 1995: 13-15]。

ディン・ザー・カイン (Đinh Gia Khánh) は, 広義の民間文化は厳密には「フォークロア」ではなく「フォークカルチャー (folkculture)」に当たるとしている [*ibid.*: 13-14]。しかし, もともと民間文化は「フォークロア」に対応するものとして登場しており, 一般的には, 民間文化と「フォークロア」は同一視される [Viện Văn hoá dân gian 1990: 34-35; Vũ Ngọc Khánh 1995: 184-185]。チャン・クオック・ヴオン (Trần Quốc Vượng) は, ベトナムでは, 「Folklore」という字に「民間文化 (Folkculture)」を当てたのだとしている [Trần Quốc Vượng 1990: 77]。つまり, 民間文化の方が「フォークロア」よりも広い対象を指すが, ディンのように細かく定義する場合を除いて差異は意識されず, 両者の対応が語られる傾向がある。このように, 民間文学, 民間文芸, 民間文化では確かに, 対象が拡大している。坂内は, ソビエト「民俗学」の流れについて, 一般に「口承文学, 言葉としての民衆文学のみを対象として」いたが, 1970 年代には, 儀礼に対する関心が高まるとともに, 「民俗事象」に対する総合研究の必要性が提唱されてきたとしている [坂内 1978: 356]。社会主義ベトナムの手本の 1 つであったはずのソビエト連邦 (当時) でもそうであったように, 対象の拡大という学術的要請の高まりは, 社会主義ベトナムに限ったことではない。

しかし, 社会主義ベトナムのフォークロアの収集と研究における, 民間文学から民間文芸, そして民間文化へという流れは, そうした学術的側面⁷⁾からだけではなく, 文化政策との関わりからも検討する必要があると考える。社会主義ベトナムで, 民間文芸が用語として政策文書や研究者の論考などに登場するのは, 1966 年, 大衆組織 (tổ chức quần chúng) であるベトナム民間文芸会 (Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam) が設けられた時期と重なる。民間文芸会は, 社会主義ベトナムにおける 1950 年代末からの社会主義的改造の本格化と 1960 年代半ばのベトナム戦争激化によって大衆文化政策の重要性が高まった中で誕生した。そして, 民間文芸は現代の大衆や職業作家と芸術家の創作, 文化活動への応用を前提として収集されていた。その後, 民間文化が「フォークロア」に対応する漢越語として, 研究者らの論考の中に頻出し出すのは, 1979 年, ベトナム社会科学委員会 (Ủy ban Khoa học xã hội Việt Nam) の中に, 民間文化委員会 (Ban Văn hoá dân gian) が創設されたのと時期を同じくしている。同委員会は 1983 年には国立の研究機関, 民間文化院 (Viện Văn hoá dân gian) へと発展した。民間文化委員会と民間

7) 本稿では一部で「学術」「学術性」という表現をしているが, 最初に述べた通り, 社会主義ベトナムにおけるフォークロアの収集と研究は常に政策への貢献を求められており, 政策から完全に切り離された「学術」というのは存在しない。本稿ではそれを志向しているかという, あくまで程度の問題として論じる。

文化院は、ベトナムの南北統一（1976年）後の文化政策の方針転換、1970年代末からの中越関係の緊迫により、民間文芸が「旧体制的」であるとして収集と研究が停滞した時期、そして社会全体からの中国の影響の排除が唱えられるとともに、「ベトナム文化」の歴史と伝統が強調された時期に設立された。この民間文化という用語のもとでは、現代の創作や文化活動とは切り離れたところで歴史としてフォークロアを捉えるとともに理論的研究が志向された。本稿では、「フォークロア」に相当する新たな用語がそれぞれ登場した背景には、それぞれの時期の国内・国際環境に対応した文化政策の変化があったことを指摘する。そして用語の変化は、対象の拡大だけでなく、フォークロアの収集と研究の目的と、現代における創作や文化活動との関わり方の転換も伴っていたことを示したい。

「民間文学」「民間文芸」「民間文化」は、いずれも中国語でも使用されており、社会主義ベトナムで使用されているこれらの用語が中国語を起源とすることが推測できる。しかし、それを「中国の影響」⁸⁾と論じるのみでは十分ではない。例えば、中国では1928年に中央研究院歴史語言研究所内に民間文芸組が設立され、民間文芸を冠した組織がすでに誕生している[刘2006: 280]。中華人民共和国成立後は、1950年3月に民間文芸研究会（中華全国文学芸術会連合会傘下の専門家協会、中国民間文芸家協会の前身）が設立され、民間文芸の研究のほか、民間文芸を「加工、向上、発展」させ、「新民主主義的文芸」を創造することを掲げていた[ibid.: 589]。それに対し、社会主義ベトナムにおいて民間文芸が用語として登場し、民間文芸会が設立されたのは、なぜ1960年代半ばだったのか。用語の導入の時期は、ベトナムの国内事情に基づき説明することが必要であると考えられる。また、中国との関係が極端に悪化した1970年代末から1980年代は、中国の影響の排除の動きがあったことも考慮に入れる必要がある。

これまでベトナムの民族学（dân tộc học）が、民族政策の推進に貢献するものであったことは論じられてきた[伊藤2008]。ゴとグエンは、ベトナムにおいても民族学と「フォークロア」研究の境界は明らかではないと指摘する。しかし、「フォークロア」研究では「審美（thẩm mỹ）」の観点からアプローチするのに対し、民族学はエスニシティ（tính tộc người）や民族文化の本質（bản sắc văn hoá tộc người）、エスニック・グループ間の文化交流や接触に

8) 伊藤は、ベトナムの民族学が民族識別において、中国の民族政策と民族学をいかに参照したかについて、結果から見れば大いに参照されていたと考えられるが、直接文献を引用する事例はほとんど見当たらず根拠としては状況証拠的なものでしかないとする。そして、その理由を1960年代後半から文化大革命に突入した中国とは社会主義路線に相違が生じていたこと、ベトナム戦争終結直後、両国関係が目に見えて悪化したことから、中国の民族学研究を表立って紹介したり参考にしたたりするのは憚られたためであると考察している[伊藤2008: 41]。ベトナムのフォークロア収集と研究、中国の民俗学の関係についても同様のことがいえる。なお、1990年代初めには中国の民俗学を紹介した論考（例えば[Kiều Thu Hoạch 1992: 27]）が出ている。

より関心が向いているとする [Ngô Văn Lê and Nguyễn Văn Tiệp 2003: 109-110]。このように 2 つは近接あるいは一部は重複しているものの異なるものであると認識されている。民族学とフォークロアの収集と研究を分けて考察する価値は十分にあると考える。

先行研究⁹⁾では、社会主義ベトナムにおけるフォークロアの収集と研究に言及した論考はいくつかある。しかし対象とする時期が限定されていることが多い。ニンは、1945 年から 1965 年までの社会主義ベトナムにおける文化政策を論じる過程で、1940 年代半ば、ホアイ・タイン (Hoài Thanh) など知識人が、民衆の文化 (popular culture) に「ベトナム文化」の真髄を見出していたことを指摘した [Ninh 2002: 65]。ペリーは、社会主義ベトナムにおける歴史観の形成を考察し、1950 年代半ば以降、研究者らが、ベトナムの歴史の探求にも益するものとして、フォークロアと民衆の文化 (folk culture) に興味を抱いていたとした [Pelley 2002: 131-140]。¹⁰⁾ 主にドイモイ以降の時期を扱った研究としては、テイラーは民族学者 (ethnologist) とフォークロア研究者 (folklorist) による民間信仰に関する研究が、「迷信」とされていた民間信仰を文化的象徴として評価する流れを促進するものだったことを論じた [Taylor 2003]。ザレミンクは、ベトナム人研究者たちが行った、中部高原の少数民族のフォークロアや文化に関する収集と研究が、国家政策に沿った「ふさわしい」文化を人々の生活から切り離して選択的に保存する「フォークロア化 (folklorization)」につながっていると指摘した [Salemink 2013: 168]。¹¹⁾ 以上の研究では、いずれもフォークロア研究の政策的意義に触れているものの、1960 年代から 1980 年代までの時期については詳しく取り上げていない。これは、ベトナム国外の研究者たちの関心が、主に社会主義ベトナムの文化政策の基本的方針が策定される初期の時期と、ドイモイ以後の文化「復興」に集中していることを反映していると考えられる。しかし 1960 年代からドイモイまでの時期もより細かく見る必要がある。この時期、社会主義的改造の本格化、ベトナム戦争や中越戦争など国内・国際情勢は大きく動いており、それを受けて文化政策も移り変わった。そして、フォークロアの収集と研究も文化政策に応じて変化してきたからである。このほかにミーカーは、民謡とされるクアンホ (Quan họ) に関する研究の中で、ベトナムにおける民謡の収集と研究を振り返った [Meeker 2013: 25-29]。大泉は、社会主義ベトナムにおける民間文学の収集と出版の政策的意義を考察した [大泉 2014]。この 2 つの論考では、1960 年代からドイモイまでの時期にも言及しているが、それぞれ民謡と民間文学という限定された分野を対象としており、フォークロア収集と研究の全体像は描い

9) これ以外にベトナムでは、フォークロアの収集と研究の歴史をまとめた論考はいくつかあるものの、これらはいずれも研究成果の羅列であるか、既出のように学術的観点からまとめられている。

10) ここでのペリーとニンの研究に関するレビューは [大泉 2014: 25] と一部重複している。

11) ザレミンクは、別稿で民族学者 (ethnologist) に関して論じる際にも「フォークロア化」の概念を用いている [Salemink 2003]。

ていない。さらに、先行研究全般において、民間文学、民間文芸、民間文化という漢越語の変遷には注意が払われてこなかったことを指摘できる。¹²⁾ 本稿はこうした用語の移り変わりを含め、社会主義ベトナムにおけるフォークロアの収集と研究の歴史の全体像を、政策との関わりから記述したい。

以下、まず第Ⅱ章「民間文学研究から民間文芸収集へ」において、大衆文化政策の進展に伴い、民間文芸が用語として使用されるようになったことを示す。次に第Ⅲ章「民間文芸収集から民間文化研究へ」では、ベトナム南北統一後の文化と思想面における「旧体制的」要素排除の主張の高まりと中越関係の緊迫を、民間文化という用語が新たに使用されるようになった背景として指摘する。第Ⅳ章「1990年代以降の民間文化に関する収集・研究の活発化」では、1990年代には「民族文化」再評価の流れを受けて、収集が再び活発化したこと、2000年代には無形文化遺産 (di sản văn hoá phi vật thể, intangible cultural heritage) 概念の流入に伴い、民間文化という用語の存在意義が揺らいでいることを論じ、民間文化の含意の変化を追う。

本稿では、民間文学、民間文芸、民間文化の収集と研究にそれぞれの時期で携わった文史地研究委員会 (Ban Nghiên cứu Văn Sử Địa)、文学院 (Viện Văn học)、ベトナム民間文芸会、民間文化院が発行した学術雑誌に掲載された論考のほか、収集と研究に関して行われた会議の議事録、収集と研究に携わった研究者による回顧録、文化政策に関連して出された党と政府の政策文書を中心とした文献資料をもとに考察を行う。

Ⅱ 民間文学研究から民間文芸収集へ

1. 民間文学研究の開始 (1955～50年代末)

日本や中国、朝鮮半島など東アジアにおいて、漢字で表記される「民俗学」が興隆した20世紀前半、仏領のベトナムでは、フランス語として「folklore」が使用されていたことを確認できる (例えば [Bui 1937])。¹³⁾ また仏領期には、文学や言語を通して「ベトナムらしさ」を探究しようとする中で、ベトナムの複数の知識人がベトナム語の口頭伝承¹⁴⁾に興味を抱いていた。例えば、ズオン・クアン・ハム (Dương Quảng Hàm) はベトナムの文学史を解説する中

12) 上記以外では、ワサワクン [Vasavakul 2003] が、ドイモイ以降の国家と大衆組織の関係を論じる事例として民間文芸会を取り上げている。その組織の性質を理解する上では参考になるものの、フォークロアの収集と研究自体についてはほとんど考察されていない。

13) この時期にフランス語として「folklore」が存在したことが、ベトナムにおける「民俗」「民俗学」という漢越語の不在の一因と推測される。この点の検証も含め、仏領期に関しては今後の課題としたい。

14) 昔話、諺、民謡の歌詞などに後に民間文学と呼ばれる対象を (民間文学という用語が登場する前の時期である) ここでは口頭伝承と呼ぶ。

で、口頭伝承を平民文章 (văn chương bình dân) と呼び、「人々 (dân ta) の気質や風俗を、素朴で誠実に表している」[Dương Quảng Hàm 1968 [1941]: 9] と評価した。社会主義ベトナムで始まる研究は、ズオン・クアン・ハムらの文学研究の流れを汲むものであるといえる。それと同時に、口頭伝承に対して社会主義に沿った新たな解釈を当てはめることが必要とされた。¹⁵⁾

1953 年に文学と歴史、地理に関する研究を行う党の組織として、文史地研究委員会が設けられ、そこで民間文学の研究が本格的に始まった [大泉 2014: 25]。同委員会の設立は、マルクス・レーニン主義と党の路線に対して理論的貢献を果たすもの、「反動的で間違った (phản động, sai lầm)」観点や思想を批判するものとして、文学や歴史、地理の研究を成立させることなどを目指したものだたとされる [Viện Sử học Việt Nam 1993: 6]。同委員会に所属したヴ・ゴク・ファン (Vũ Ngọc Phan) は 1955 年に『ベトナムの昔話』[Vũ Ngọc Phan 1955] を出版し、その中で「民間文学 (dân gian văn học)」という表現を使用した。¹⁶⁾ それまで口頭伝承は「平民文学」と呼ばれることが多かったが、ヴは「現在、人民が主となっているのに、封建時代でもないのに『平民』と呼ぶことがあろうか」と考え、「平民」を「民間」に置き換えたという [Vũ Ngọc Phan 2008[1987]: 523-524]。¹⁷⁾ 文史地研究委員会が発行した学術雑誌『文史地研究』では、「ボム (Thằng Bòm)」「タムとカム (Tám Cám)」「状元 クイン (Trạng Quỳnh)」「タイク・サイン (Thạch Sanh)」をはじめとするよく知られた昔話のほか、民謡などに関する論考が複数掲載された [Viện Văn học 2004: 7-252]。そのうちの 1 編でホア・バン (Hoa Bằng) が「ベトナムの新しい文化の推進に益するため、今日、我々は古い作品を整理 (chỉnh lý) 批判し、よいものを選び、卑小なものを排除する」[Hoa Bằng 1956: 63] と記しているように、「ふさわしい」作品の選別に主眼を置いて研究が行われていたといえる。労働者と農民たちの知恵や道徳、支配階級に対する闘争が表現されていると解釈できる作品が賞賛さ

15) 例えば仏領期を代表する知識人ファム・クイン (Phạm Quỳnh) は、1919 年、『南風雑誌』の中で「ある人種の気質を理解したければ、民間の歌の音色とことばを聴くのが一番である」と記すなど口頭伝承に注目していた [Marr 1988 [1981]: 156]。しかし、口頭伝承の中で権力への抵抗が描かれている部分には言及せず、そこに人々の素朴さや従順さが表現されているかのように扱っていた [ibid.]。社会主義政権下では逆に、権力への抵抗が表現された口頭伝承が研究者らによって評価された。

16) 現在民間文学は「文 学 民 間 văn học dân gian」で定着しているが、ヴは当初「民 間 文 学 dân gian văn học」としていた。

17) 特に 1954 年以降、「人民のための文学」が提唱されるようになったが [川口 2000: 54]、人民文学 (văn học nhân dân) は博学文学 (văn học bác học) と平民文学 (văn học bình dân) の区別を解消したところに存在するものとされる [Cao Huy Đình 1968: 61]。「平民」を「民間」に書き換えることは、人民文学の理念にも叶うものだったといえる。またヴは『ベトナムの昔話』の中で、ソ連や中国の例を引き、他の社会主義国では昔話が少年や児童の教育にも役立てられていると記した [Vũ Ngọc Phan 1955: 29-30]。つまり、ヴは民間文学という用語とともに、その政策的意義や使用方法も他の社会主義国から学ぼうとしていた。

れ、逆に、地主などが自らの権威を示すために利用したとされる作品が批判された。1959年には文学院が設立され、研究が継続された〔大泉 2014: 25〕。文学院には、古代・近代・民間文学グループ（tổ Văn học cổ đại, cận đại, dân gian）が置かれ、そこから1960年末にベトナム各民族の民間文学グループ（tổ Văn học dân gian các dân tộc Việt Nam）がつくられた〔Vũ Ngọc Phan 2008 [1987]: 520-521〕。¹⁸⁾

民間文学の研究が開始された当初は大々的な収集は行われていなかったと見られる。民間文学の研究で中心的な役割を果たしていたヴの回想によれば、グエン・ドン・チ（Nguyễn Đồng Chi）はフランス極東学院図書館（ハノイ）に残されたフランス語資料など¹⁹⁾に収録されたベトナムの昔話をもとに追加と整理を行い、『ベトナム昔話の宝庫（Kho tàng truyện cổ tích Việt Nam）』（1957）を編集した。またヴ自身は、以前から妻ハン・フオン（Hàng Phương）とともに、老人たちから諺やカーザオ、民謡などを聞いて書き取っており、それを参照していた〔*ibid.*: 523〕。文学院設立後も文学研究全般において資料が不足していたという〔*ibid.*: 520〕。このように、当初、民間文学の研究で用いられた資料は、仏領期以前の文献や研究者本人たちが収集したものに限られていた。

2. 民間文学の収集の活発化（1960年代初め～1960年代半ば）

1960年代初めから、地方を含めて民間文学の収集が行われるようになった。収集が広がった背景として、1950年代末からの大衆文化政策（công tác văn hoá quần chúng）によって大衆による文化活動が奨励され、民間文学に対する関心が高まったことを指摘できる。

1958年、農業集団化や商工業の国営化など、党は社会主義化の着手へと大きく舵を切り〔栗原 2011: 192〕、文化領域は社会主義に大衆を動員する思想的原動力として位置づけられるようになった〔栗原 1988: 21-22〕。1960年の第3回党大会政治報告で、レ・ズアン（Lê Duẩn）は、上記の観点から「大衆（quần chúng）が広く文芸を行う運動を起こすことは非常に重要な意義がある」と説いた〔Cộng Hoà Xã Hội Chủ Nghĩa... 1987: 17〕。大衆文化政策の強化を唱えた1961年1月の党中央委員会8号指示では、具体的に次のような文化活動が推奨された。

- ① 主要な記念日を祝い、収穫や工業生産計画達成などを祝して、折々に演芸会（hội diễn

18) 大泉は、文学院の50年を振り返ったフォン〔Phong Lê 2003: 14〕の記述に従い、古代・近代・民間グループから民間グループが独立したとした〔大泉 2014: 25〕。恐らくフォンは、当時呼び習わされていた短縮した呼称を書いていると見られ、本稿で依拠したヴはその正式名称を記述していると考えられる。

19) 実際にグエンは、ランド（A. Landes）の『安南の昔話と伝説（Contes et légendes annamites）』（1886）などフランス語資料のほか、中世ベトナムの説話集『嶺南摭怪』などの漢文資料や仏領期の（クオックグー、すなわちローマ字表記ベトナム語による）新聞雑誌、文献等も参照している〔Nguyễn Đồng Chi 1974 [1957]〕。

văn nghệ) や交流会を開催する。

- ② 特に軍隊、青年、工場労働者、農民、学徒による歌謡やダンスを運動として発展させる。
- ③ 大衆が「新しい人間、新しい生活」などを主題とした語り合い、詩歌の創作、詩吟、演劇、壁新聞の執筆などを行う。
- ④ 工場、農場、軍、行政村などでアマチュア (không chuyên nghiệp) 芸術団を組織する [ibid.: 26-27]。²⁰⁾

このように、大衆による文化活動が奨励される中、民間文学は大衆が創作した文学²¹⁾として注目された。特に、民謡は①、②、④の活動の中で歌われ、また③の創作においても参照できるものであったが、その歌詞は民間文学として扱われることも多かった。²²⁾ その結果、文学院だけでなく、各地の大学や省・自治区の文化局なども収集を行うようになった。例えば、1964年12月に開催された「全北部民間文学収集会議 (Hội nghị sưu tập văn học dân gian toàn miền Bắc)」での報告によれば、ゲアン省のヴィン (Vinh) 師範大学が、1964年までの5年間にタインホア、ゲアン、ハティン、クアンビンとクアンチの各省、45 行政村で合計 4 回の集中的な収集を行った際、毎回 150 人以上の教員と学生が参加したという [Hoàng Tiển Tự 1966: 118-119]。またディンは、ハノイ師範大学の活動について報告し、収集対象地域での協力者の確保、つまり大衆動員 (công tác vận động quần chúng) が重要であるため、収集に参加した学生たちは大衆政策に関する教育も受けたとした [Đinh Gia Khánh 1966: 114-115]。

こうして民間文学収集は活発化した。しかし、問題が表出していた。1961年12月にも「全北部民間文学収集会議」が行われていたが、それについて既出のヴは次のように振り返った。

全ての報告で民間文学の豊かさに言及していた。ところが、収集活動はまだ組織化されていなかった。音楽、舞台芸術などいくつかの分野の中央機関や個人の芸術家が収集に赴いていた。しかし、それは自分たちだけで使用するためにすぎない。時に、1種類の民謡、1曲の民謡でしかないのに、地方の芸能家 (nghệ nhân) たちは、何十回も (異なる収集者のために：筆者補足) 繰り返し披露しなければならなかった。そして、その人たちも、

20) ①から④の番号は整理のために筆者が付した。

21) 民間文学としては、古くから伝わる作品だけでなく、そのジャンルにおいて新たに創作された作品も収集されていた。その後 1969 年には、「現代民間文学 (văn học dân gian hiện đại)」に関する会議も開かれた。その報告書が『ベトナムの民間文芸をつくることに関する意見——参考資料』[HVNgDGVN 1974] として出ている。

22) 大躍進政策下の中国では、1958 年から 1959 年に「新民歌運動」が展開された。「民歌」「民謡」の収集と創作が重大な政治的任務とされ、全国の各級党委員会に「民間歌謡収集機関」が設置され、「新民歌」「新民謡」の収集と創作に当たった [岡 1997: 176-177]。収集や創作の対象となった「新民歌」「新民謡」は、① 共産党賛歌、② 農業大躍進賛歌、③ 工業大躍進賛歌、④ 祖国防衛賛歌であるとされる [同上書: 177]。直接の言及はないが、民謡の利用については、こうした中国のモデルが参照されていた可能性がある。

収集に来たのが誰であるのかも覚えてはいなかった。[Vũ Ngọc Phan 2008[1987]: 521-522]

上記の大衆文化政策を背景として、民間文学だけでなく、音楽や舞台芸術などの分野においても地方での収集が活発化していたと見られるが、民謡のように複数の分野にまたがっているものの場合、収集活動の重複が起こっており、課題となっていた。こうした問題は文化省も認識していたと見られ、既出 1964 年の「全北部民間文学収集会議」²³⁾でも、文化省の音楽舞踊部 (Vũ Âm nhạc và múa) を代表して出席したレ・フイ (Lê Huy) が、民間文学に関する施策 (công tác) と民間の音楽に関する施策は緊密な関係にあるとし、民間の文学と芸術の収集を統一的に指導する必要があるとしていた [Lê Huy 1966: 179-180]。このほかに文学院を代表して同会議で報告を行ったヴは、チェオ (chè, 村祭りなどで演じられる歌劇) や民謡を例に挙げ、民間の文学と芸術を切り離すことはできないことを指摘していた。彼はこれを、地方における劇の創作、音楽に関する施策 (công tác âm nhạc) に必要な認識として挙げていた [Vũ Ngọc Phan 1966: 38]。つまり 1960 年代前半、収集をいかに進め、いかに創作し、いかに大衆に普及させるか、言い換えるならば、大衆文化政策をよりよく推進するという観点から、民間の文学と芸術を合わせて把握することが提起されたといえる。この 1964 年の会議は、1966 年の民間文芸会の設立につながったとされている [Vũ Ngọc Phan 2008[1987]: 523]。同会議では、ヴが学校や芸術団も含めた様々な組織が民間文学の収集に関わる中、収集を統率し指導する組織の創設が必要であると提言した。そして、組織の形態の一例として、他国では民族院とその地方分院、あるいは民間文学会とその地方支部があると紹介した [Vũ Ngọc Phan 1966: 40, 42]。この他国の「民間文学会」とは、中国の民間文芸研究会のことを念頭に置いていると見られ、中国における民間文芸収集をある程度参照しつつ、ベトナムの国内状況への対応として、民間文芸収集が唱えられるようになったと考えられる。

3. 民間文芸会の設立と民間文芸収集の推進 (1966 年～)

1966 年 11 月には、ベトナム民間文芸会が、民間文芸の収集と研究、紹介を任務とする大衆組織²⁴⁾として設立され、以後、民間文芸が用語として広く使用されるようになった。民間文芸会の設立を立案したのは、当時の文化省副大臣ハ・フイ・ザップ (Hà Huy Giáp) で、彼は会則の策定に携わり、チュオン・チンにも意見を求めたとされている。ハは文化省や地方文化局に

23) 発表原稿を集めた報告書 [Tổ Văn học dân gian ... 1966] では、民間文芸という表現は登場しておらず、ここからも民間文芸が用語として使用されるようになるのは、民間文芸会設立とほぼ同時期であったことがわかる。

24) 民間文芸会は、ベトナム文学芸術連盟会 (Hội liên hiệp Văn học nghệ thuật) の下部組織となった。

よる大衆文化政策と民間文芸会の活動が密接な関係を保つことを主張していた [HVNgDGVN 1994: 9]。つまり、同会設立や民間文芸収集の推進は、大衆文化政策の中に位置づけられていた。ここからも民間文芸という用語が大衆文化政策を背景として登場したことがわかる。1965 年 2 月にはアメリカ軍による継続的な北爆が開始され、同年 7 月にはアメリカが米軍戦闘部隊の大量投入を決定した [古田 1995: 163]。ベトナム戦争²⁵⁾の激化を受けて 1965 年 7 月の党中央書記局 104 号指示で、文化文芸には「抗米救国」の精神を教育する任務があること [Cộng Hoà Xã Hội Chủ Nghĩa... 1987: 29]、「教員や学徒、青年、民兵など動員できる力は全て動員し、大衆のアマチュア的文化活動を推進する必要がある」[*ibid.*: 31] ことが明記された。こうして大衆文化政策の重要性がさらに高まる中、同会が設立された。²⁶⁾

民間文芸収集が、大衆文化政策の一環として進められたことは、民間文芸会の設立大会におけるハ・フイ・ザップの発言にも表れている。

大衆が過去現在のものを収集するようにする、大衆が自ら創作し演じるようにするという各面を含んだかたちで、大衆が広く文芸を行う運動を展開してはじめて、今昔の民間文芸を正しく研究することができ、職業 (chuyên nghiệp) 文芸の運動を推進するための有益な教訓²⁷⁾を得ることができる。[Hà Huy Giáp 1969: 41]

民間文芸の収集は、創作や演じることとともに、大衆による文芸運動の両輪を成すものと捉えられていた。設立大会では同会主席のホアイ・タイン (Hoài Thanh) も、大衆が収集を行うように啓発すれば「大衆は全てを解決する」として、「家庭ごと、合作社ごと、企業ごと、軍隊の単位ごとに、行政村から省に至るまで」、専門や場所を問わず、全ての人間が収集に参加するべきだと述べた [Hoài Thanh 1969: 31-32]。民間文芸会の規約や設立大会での報告では、民間文芸が民間の文学と芸術を合わせたものとされている以外は、それが指し示す範囲は明確に定義されていない [HVNgDGVN 1969]。しかし報告内容を総合すると、民間文学、音楽や民間の踊り、劇さらには工芸などが扱われており、本稿の「はじめに」で示した民間文芸の内容と合致している。これらが民間文芸という枠組みのもとで盛んに収集されるようになった。

25) 本稿では、1960 年 12 月の南ベトナム解放民族戦線の結成から 1975 年 4 月のサイゴン陥落までをベトナム戦争と呼ぶが、フォークロアの収集と研究の動向に直接影響を及ぼしたのは 1965 年 2 月以降の戦況であると考えられる。

26) この段落は、[大泉 2014: 26] で書かれた、民間文芸会の設立に関する記述をより詳しくしたものである。

27) 川口によれば、1950 年代末から、文学では人民のための「大衆文学」の強化が叫ばれ、また作家や芸術家たちが労働者・農民・兵士らをよりよく理解し、作品に反映することが求められた。そのため、作家や芸術家が生産現場や農村に入ったり、従軍したりすることが奨励された [川口 2000: 54-55]。

一部の省では民間文芸会の地方支部もつくられ、北部の地方文化局各局には民間文芸小委員会 (Tiểu ban Văn nghệ dân gian) が設置された [Nguyễn Xuân Kinh 2001: 58]。そして、各行政村で行政村幹部や教員と生徒のほか、退役軍人や文芸を趣味とする老人らを動員して、収集グループをつくるのが奨励されるなどした [Cao Huy Đình *et al.* 1969: 97]。²⁸⁾ 民間文芸収集の政策的推進は、フォークロア収集を、研究者らの研究に付随する行為だけではなく、大衆の文化活動の一環へと広げるものだった。

4. 民間文芸における「整理」「改編」

収集された民間文芸は、大衆や職業作家あるいは芸術家による文化活動に利用されることが想定されていた。そして、利用する際には場合によって「整理 (chỉnh lý)」や「改編 (cải biên)」が必要であるとされた。ハ・フイ・ザップは民間文芸会設立大会で次のように述べた。

民間文芸の作品の全てが、正しく人民の思想や願望を反映しているとは限らず、支配階級の思想の影響が混じっているものもある。よって民間文芸の作品には思想の中身で多くの矛盾を含むものもある。(中略) 従って我々は、新しい生活に奉仕するため、整理改編 (chỉnh lý cải biên)、思想性の向上、支配階級的思想や迷信の排除を行わなければならない。[Hà Huy Giáp 1969: 43-44]

このように、思想的な問題を排除することが必要とされた。「整理」とは問題のある部分の排除を行うことや一部を修正することを指し、「改編」とは、もとの形式を尊重しつつも部分的修正に留まらない加工を行うことを意味していると考えられる。例えば、ミーカーは、民謡に関して、「整理」とは歌詞の修正を指し、「改編」とは「新規の旋律を加えることなく古い旋律を見直す (revision) こと」、「創作 (sáng tác)」とは民謡の特定の旋律的モチーフをもとに作曲することとするグエン [Nguyen 1991: 4] の説を引用した。そして、グエンの言う「創作」の一種が、「改編民族音楽 (nhạc dân tộc cải biên)」あるいは「現代民族音楽 (nhạc dân tộc hiện đại)」と呼ばれるものとした [Meeker 2013: 36]。ミーカーが、「創作」したものを「改編民族音楽」としているように「改編」の解釈は多様である。またそれが「整理」「改編」「創作」のいずれに当たるかを明確に分けることはできないだろう。1968年に開かれた第4回

28) 実施状況は地域によって異なると考えられるが、例えば、当時のナムハー (Nam Hà) 省では、成功例として1970年代前半に、高校 (cấp 3) 5校と中学 (cấp 2) 6校において、生徒を教員が引率して収集活動を行ったことが報告されている。ある中学では、1人の教員が勤務校の教員組織 (Hội đồng giáo viên) に、「わが故郷の伝統」などの主題で収集活動を行うことを提案し、了承された。そして、生徒たちは詩歌や昔話などを多数集めた資料集を完成させたという [Đoàn Tùng 1976: 44]。

文芸大会では、民間文芸会副総書記のカオ・フイ・ディン (Cao Huy Đình) が、大衆がカーザオや詩吟、昔話、チェオなど古いものを新しい生活に合うように「改編」していると称えていた [Cao Huy Đình 1968: 60]。カオの言う「改編」とは、問題のある個所の排除に留まらず、時代に「ふさわしい」ものにより積極的に作り変えてゆくことを意味していた。民間文芸は、文学や歌謡、劇、工芸など分野が多岐に渡り、その「整理」や「改編」を一概に論じるのは困難であるが、ここでは民謡を一例に挙げたい。²⁹⁾ ベトナム戦争を背景として 1965 年から 1972 年には「歌声は爆弾の音を遮る (Tiếng hát át tiếng bom)」運動が展開されていたが [Nguyen 2007: 163]、同運動では、各行政村や学校、工場などで歌謡や音楽の学習が行われ、「抗米」や労働を主題とした曲が導入されたほか、民謡の旋律に自作の歌詞を添えた曲も使用されたと報告されている [Việt Nam Dân Chủ Cộng Hoà... 1974: 225-226]。民謡の旋律に「抗米」を呼びかける歌詞を添えることは、既出のカオがいう大衆による「改編」、あるいは「整理」の一例として見ることができる。職業作家や芸術家による「改編」としては、例えば民謡のクアンホでは、1960 年代末からテンポを速め、歌詞を単純化し、伴奏を加えるなど、ステージでの歌唱に適したクアンホが生まれたとされる。そしてこの時期に生み出された作品が、舞台やラジオ、テレビなどを通して普及し、今日ベトナムでよく知られる「クアンホ」になったという [Meeker 2013: 71]。このように内容を「整理」「改編」し、それがもともと用いられていた場、例えば民謡なら村祭りなどから切り離し、新たな文化活動の場、例えばステージなどへともたらしことが目指された。一方で、後述の 1970 年代後半と異なるのは、ハが「支配階級的思想や迷信異端は、民間文芸に影響を及ぼしている要素にしかすぎず、民間文芸の主要な要素ではない」[Hà Huy Giáp 1969: 44] ともしていたように、民間文芸が一部を除いて基本的には大衆文化政策の推進に役立つものと見なされていた点である。問題のある個所がなければ、手を加えずに利用することも否定されていなかった。

以上のように、民間文芸という用語は、大衆文化政策をいかに進めるかという政策的関心から民間の文学と芸術を総合的に把握しようする中で登場したといえる。この時期、その収集は大衆や職業作家と芸術家による創作と文化活動への応用を第一の目的としており、研究者たちも収集の方法論を盛んに論じていた。民間文芸が総体として語られるのは、そうした収集と利用の文脈においてであった。研究を見れば、民間文芸会は、各研究機関に所属する研究者が会員として集う組織に過ぎず、依然として詳しい内容の研究は、文学や音楽、美術など各分野、各機関で行われていた。個別の研究としても、後の時期以上に政策に直結した成果を出すこと

29) 他に [大泉 2014: 30] では、少数民族ムオン人の祈祷師が民間文学として 1970 年代半ばに出版される中、物語に登場する祈祷師を「化け物」として描いているとしている。「迷信異端」とされた祈祷師に関する描写の編集が行われていると見られ、これは民間文学の「整理」の一例と考えることができるだろう。

が求められていた。例えば民間文学では、文郎国 (Văn Lang, ベトナム最初の国家と伝わる) を治めたとされる雄王 (Hùng Vương) の来歴を語った伝説をはじめ、神話や昔話の研究が盛んに行われ [Hà Châu 2003: 479], それらを「国民統合」の根拠づけとすることが目指されていた。

III 民間文芸収集から民間文化研究へ

1. 南北統一後の民間文芸収集の衰退 (1976～77 年)

1975 年 4 月にサイゴンが陥落し、ベトナム戦争が終結すると、当初は、南部を含めた全国における民間文芸の収集が進められると見られた。1975 年 9 月には「全北部における民間文芸収集の経験を補う会議 (Hội nghị bồi dưỡng kinh nghiệm sưu tầm văn nghệ dân gian toàn miền Bắc)」が開かれており、文化省副大臣のノン・クオック・チャン (Nông Quốc Chấn) は、民間文芸収集を南部にも拡大する必要性があることを述べ、文化省は民間文芸会や関連分野と連携していくとしていた [Nông Quốc Chấn 1976: 21]。1976 年 11 月には民間文芸会が設立 10 周年と第 4 回党大会開催を祝う会合を催し、同会総書記のヴ・ゴク・ファンは、「ベトナムの民間文芸は必ずや発展し、北部南部が歩みをとともにして収集活動を行う」[Vũ Ngọc Phan 1976: 31] としていた。

しかし、南北統一後のベトナム社会主義共和国 (1976 年 7 月～) では、民間文芸収集は停滞した。この時期の文化政策で最も重要視されたのが、「旧体制的」要素を排除した「新しい文化」の建設であり、その中で、民間文芸が「旧体制的」と見なされるようになったためであると考えられる。

南北統一当時、南部には過激な性的描写を含む映画や音楽をその代表として「消費文化 (văn hoá tiêu dùng)」の産物が蔓延していたとされる [Trà Linh 1977: 20]。党は、南部の社会主義的改造を文化面でも進めようとしていた。1976 年 12 月の第 4 回党大会では、南部において「アメリカ・傀儡政権」の新植民地主義 (chủ nghĩa thực dân mới) により形成された「奴隷的で退廃的、混血的、極めて反動的な『文化』」を廃絶することが課題として挙げられた [Lê Duẩn 1984: 84]。さらに、同大会では文化や思想面において、新植民地主義だけでなく、フランスの植民地主義、それ以前からの封建的思想の影響 (tàn dư) も残っているとして排除が訴えられ、南部に限らず全国規模の課題とされた [Văn nghệ 1977.2.5]。³⁰⁾

30) 同大会では、「社会主義的内容と民族的性格」をもった「新しい文化」や「社会主義的な新しい人間」の創出などが、党書記となったレ・ズアン特有の「集団の主人公権制度」の建設と合わせて提起されたとされる [栗原 2011: 194]。「新しい人間」の「新しい文化」の建設という文脈からも、「旧体制的」要素の排除が主張されたと考えられる。

「旧体制的」要素の排除の強化が唱えられる中、党や政府による文化面での指導において、「古い」ものの「改編」が以前にも増して志向されるようになった。例えば 1977 年 8 月、文化情報省（1977 年 7 月文化省から改称）副大臣のチャン・ド（Trần Độ）は、『文芸（*Văn nghệ*）』（ベトナム文学芸術連盟会機関誌）に、トゥオン（tuồng, 古典劇）やチェオ、一弦琴（đàn bầu）を例に挙げ、「もとのままでおくことや復古に陥ってはならない」とし、それら芸術の「規則（qui luật）」を取り出し発展させるべきと記していた [*Văn nghệ* 1977.8.20]。この流れは、民間文芸に対する政策的評価にも影響を与えていた。後に民間文芸会総書記を長く務めたト・ゴク・タイン（Tô Ngọc Thanh）は、次のように回顧した。

1970 年代後半、民間文芸の収集と研究は、一部の文芸指導者の単純な考えにより退潮の時期を迎えた。彼らは文芸であるなら創作しなければならないと考えていた。民間文芸は創作をしないから文芸ではない（! ?）。それだけでなく、民間文芸は古い制度の産物で、封建階級や植民地主義の「反動的思想」が表れているか、そうでなくとも「遅れた（lạc hậu, lỗi thời）」ものであると。（中略）そこから一部の要素を取り出して新たな作品の創作の材料とするに留めるのが一番である。もし使用するならば、「改編」「改善」しなければならない、「向上」させなければならない、最低でも「整理」しなければならないとされた。[Tô Ngọc Thanh 2001a: 13]

それ以前にも民間文芸の一部に「旧体制的」要素があることは指摘されていたが、トのことに従えば、1970 年代後半には民間文芸そのものが「旧体制的」と見なされるようになった。トが「1970 年代後半」と言っているように、この傾向は 1978 年以降の時期にも続いているが、最初は、南北統一後の「旧体制的」要素の排除の要請から始まったものと考えられる。またトは、「改編」がヨーロッパの古典芸術の原理³¹⁾に従って行われており「この時期の民間文芸の作品、特に歌謡や踊り、舞台音楽は信頼性がない」[*ibid.*]とも振り返っている。これは、芸術の「規則」だけを取り出して発展させるとの政策的指導の結果であったといえる。1990 年代後半から、1970 年代後半に民間文芸が置かれた上記のような状況が、当時の民間文芸会幹部などにより語られ始めている。当時の民間文芸会の内部向け雑誌『民間文芸（*Văn nghệ dân gian*）』（1975～77 年、ベトナム国家図書館所蔵）や『文芸』ではトが述べたような直接的な批判は見当たらない。トは、党幹部などが直接的あるいは間接的にこのように発言していたのを振り返っているか、当時の文芸指導により全体としてこうした雰囲気形成されていた

31) グエンは、民謡について、「新民謡（*dân ca mới*）」と呼ばれる歌謡では、西洋のボーカルテクニックや楽器が使用され、室内管弦楽団などが伴奏することがあるとしている [Nguyen 1991: 4]。ヨーロッパの古典芸術の原理に従った「改編」とは例えばこれを指すと考えられる。

と述べていると見られる。

この時期、トが言うように民間文芸の収集が衰退したことは、大衆の文化活動の指導に関する政策文書にも表れている。1977年5月の文化省73号指示では、行政村から省・市の各レベルで「民謡の歌唱と民族楽器の演奏の競技会（Thi hát dân ca và biểu diễn nhạc cụ dân tộc）」を開催することとされている。同指示では、そこで使用する曲目について次の指定がある。

2種類の資料に拠ることができる。1つは、すでに印刷された、あるいはベトナムの声放送（Đài tiếng nói Việt Nam）を通じて普及した楽曲である。新たに収集された向上、改編を経ていない原版のかたちの楽曲も使用できるが、内容が健全であることを保証されていないしなければならない。[Cộng Hoà Xã Hội Chủ Nghĩa ... 1987: 126]

この指示からは、「向上」「改編」を経て、出版物や国営ラジオ放送（「ベトナムの声」）を通じて、全国的に知られている楽曲の使用がより推奨されていたと解釈できる。また1977年5月の文化省とホーチミン共産青年団中央部（Trung ương Đoàn Thanh niên Cộng sản Hồ Chí Minh）による2号指示でも同様の傾向が見られる。「植民地主義的、封建的、資本主義的文化や社会の消極的で遅れた（tiêu cực lạc hậu）現象を遮断し排除する」ことを目的に出された同指示では、青少年による「健全な」歌とダンスの推進が指示された。そして、各行政村で歌唱団や舞踊団をつくり、団員が補習クラスに通う、あるいはラジオやテレビ、書籍や新聞を通じて歌やダンスを学習した後、青少年たちに対して指導を行うこととされた [ibid.: 131]。これらの指示には、1970年代前半までの政策文書のような、大衆自身による創作や地方での収集を奨励する文言はない。代わりに、メディアを通じて普及した（すなわち「向上」「改編」を経た）歌やダンスを用いることが指導されており、「旧体制的」要素を排除するため、文化活動の内容の管理強化が目指されていた。大衆を動員した民間文芸の新たな収集や大衆自身による創作が積極的に進められる時代ではなくなったことが読み取れる。

2. 民間文芸会の活動停止と民間文化院の設立（1978～83年）

1978年5月に入ると、華僑・華人「帰国」問題³²⁾により、中越関係の悪化が公然化した [伊藤 2003: 234]。さらに1979年2月17日には、ベトナム北部国境で中越戦争が勃発した。同年3月5日には中国は撤退しベトナム側も勝利宣言をしたが、国境沿いでの小競り合いは

32) 伊藤によれば、中越関係の悪化は中国の文化大革命期からであり、1975年の南部解放後、その度を深めた。さらに1978年3月半ば以降、中華人民共和国へわたる華僑・華人の数が増大し、同年5月、中国は「ベトナムが華僑を排斥し」ているなどとしたのに対し、ベトナムは中国政府が意図的にデマを流し、華人を動揺させ扇動し、国境を越えさせたのだと主張した [伊藤 2003: 234, 257]。

1987 年頃まで続いたとされる [同上書: 237]。前述のベトナム戦争終結後の「旧体制的」要素排除の強化に続き、中越関係の緊迫という国際環境の変化があったことは、ベトナムにおけるフォークロアの収集と研究の転換の契機となったと捉えることができる。

1978 年から 1982 年の間、民間文芸会は一時、活動を停止した。活動停止は、民間文芸が「新しい社会と社会主義にとって積極的な役割を果たさない」とされたことが主な理由であったという [Phan Đăng Nhật 1999: 15]。³³⁾ 中国との関係緊迫により、特に中国による支配の歴史が残したとされた「封建的思想」や中国の影響を排する主張が高まった。例えば、1978 年 10 月、党の理論誌『共産雑誌 (Tạp chí Cộng sản)』には、「封建的思想の残滓」が社会主義建設と「祖国防衛 (bảo vệ Tổ quốc)」に大きな害を及ぼしていると記した論考が掲載されている [Bùi Văn Nguyên 1978: 59]。中国の影響を廃すべきとの主張の高まりが「封建的思想」を含むとされた民間文芸の評価に追い打ちをかけたと考えられる。

加えて、これは明示した資料がなく推測としてしか論じることができないが、民間文芸という用語やその収集という枠組みに含まれる中国色がこの時期、敬遠された可能性がある。ベトナムが民間文芸という用語を中国に倣って取り入れたこと、ベトナム民間文芸会が中国民間文芸研究会をある程度モデルとして設立されたものであることは明らかである。1980 年初めの『共産雑誌』には、中国の文芸政策を批判する論考が掲載されているが、その矛先は文化大革命だけでなく、1940 年代からの党指導者の文芸理論にも向けられている [Hà Xuân Trường 1980: 27]。こうした中国の文芸政策に対する批判は、民間文芸収集に対する拒否感にもつながり得ただろう。この用語の起源も民間文芸に対する評価に影響していたのではないか。³⁴⁾

その後、民間文芸会が活動を停止した翌年の 1979 年 12 月には、ベトナム社会科学委員会の中に民間文化委員会が設けられ、1983 年 9 月には民間文化院が誕生した [Phan Đăng Nhật

33) 民間文芸会の活動停止が 1978 年何月からであったかを明示した資料は入手することができなかった。しかし、民間文芸会が所属したベトナム文学芸術連盟会の機関紙『文芸』にこの時期、民間文芸会の名前が最後に登場するのは、管見では 1978 年 7 月 1 日号で、短報欄には 1978 年 6 月 2 日にベトナム文学芸術連盟会の常務委員会が開催され、その中で「民間文芸会に関する決定が通過した」との記述がある [Văn nghệ 1978.7.1]。これが民間文芸会の活動停止の決定であった可能性がある。そうでない場合でも、民間文芸会の活動停止は中越関係が極端に悪化した 1978 年 5 月以降であったことがわかる。1993 年初め、雑誌『民間文化』には、ト・ゴク・ティンが民間文芸会創立 25 周年記念を祝して行ったスピーチと見られる文章の一部が紹介されているが、そこでは、「1977 年になると (đến năm 1977)」民間文芸会は活動を停止したとされている [Nguyễn Xuân Kinh 1993: 6]。しかし『文芸』では、1978 年に入っても 1978 年 7 月 1 日号以前には民間文芸会の活動に関する記事がまだ登場しており、活動停止は 1978 年だったと考えられる。

34) 一方、同じく中国の事例も参照して研究が始まった民間文学については、(民間文芸の一部を成すものではあるが) 個別の評価は異なっていたようで、例えば中部高原の少数民族の叙事詩などが研究者によって収集、研究されていた [Nguyễn Xuân Kinh 2009: 38-39]。この時期問題だったのは、大衆文化政策の一環として収集し利用するという民間文芸収集の枠組みだったといえる。

1999: 12-13]。この民間文化院の設立に向けて動いたのは、民間文芸会の総書記であったディン・ザー・カインをはじめとする研究者たちだった [ibid.: 16]。自身も同院の設立に尽力した民間文学研究者ファン・ダン・ニャット (Phan Đăng Nhật) によれば、1980 年には何度か研究院の名称に関する議論が行われ、「フォークロア」を冠することを支持する意見が多かったが、行政文書にそれを記載するには、「フォークロア」という用語はまだ馴染んでいなかった。このため、民間文化とすることで落ち着いたという [ibid.: 14]。

このように、民間文芸の収集の意義が否定された一方で、民間文化の研究が提唱されるようになった。この時期、中国に倣った、現代の創作や文化活動とつながる民間文芸の収集から、歴史性と理論の研究に重点を置き、学術性を追求した民間文化研究への刷新が図られており、そこには対象と方法論の両面で大きな変化が見られる。大枠、結果として見れば、この転換は、ベトナムのフォークロア研究に対する中国の影響の排除の意味があったと捉えることができる。

ではなぜ、民間文化が新たな用語として出てきたのか。³⁵⁾ この時期、具体的な文化活動のレベルでは、例えばレ・ズアンが1978年8月にフエでの知識人との会合で「新しい社会に合わないものは、修正し (sửa đổi), 補充し (bổ sung), 向上させ (nâng cao), 時代遅れのものは排さなければならない」[Lê Duẩn 1984: 110] と述べていたように、「旧体制的」要素の排除が唱えられ続けた。その一方で、中越関係の緊迫によるナショナリズムの高まりにより、「ベトナム文化」の歴史と伝統が強調されるようになった。つまり、現代の文化活動としては「新しさ」を求めると同時に、「ベトナム文化」の起源や本質に関する抽象的な議論においては、その歴史と伝統が誇られるという2方向の動きが出ていた。1979年末ごろの、『共産雑誌』には、「社会主義的で新しい文化」と題した特集が組まれているが、そこには、歴史学者のハ・ヴァン・タン (Hà Văn Tấn), ファン・フイ・レ (Phan Huy Lê), チャン・クオック・ヴォンが論考を寄せており、いずれも歴史的な文脈から「ベトナム文化」の起源、本質を論じている。ハ・ヴァン・タンは、次のように記した。

我が民族の歴史 —— ここでは我がベトナム文化の歴史 —— は、まず、そして主に 4,000 年以上の建国と国の維持という美しく勇ましい伝統を語っている。その伝統は今日

35) 中国では文化大革命の終了 (1977 年) 後、民俗学研究が復活し、1981 年頃から地方の民俗学会がいくつかつくられ、1983 年には全国規模の学会である中国民俗学会が成立した [王 2006: 51-52]。ベトナムで新たに始まったのが民間文化研究であり「民俗学」の呼称がここでも採用されなかったのは、中国側での用語との差異化のためであった可能性もある。「民間文化」は中国語としても用いられている。しかし、中国において学問名として定着している「民間文芸学」や「民俗学」[Kiều Thu Hoạch 1992: 27] と比べれば、採用しやすかったと考えられる。また、ベトナムの民間文化という用語は、1970 年代末に中国語の「民間文化」を参照して取り入れたのではなく、ベトナム語で「民間」と「文化」を組み合わせたものと考えの方がよいかもしれない。

なお、侵略してくる中国の膨張主義という敵を打ち、全国で社会主義を建設する我々とともにある。しかし同時に、現代に対する過去の深刻な影響も直視しなければならない。古いものを見る (nhìn vào) のは新しいものをつくるためであり、ベトナムの新しい文化と社会主義をつくるためである。[Hà Văn Tấn 1979: 71]

彼は、歴史的考察として「ベトナム文化」の4,000年の伝統を称えているが、それはあくまで振り返る対象であるとしていた。そしてベトナム文化の独自性は、「村落文化 (văn hoá làng xóm)」にあるとした [ibid.: 69]。同じく歴史学者のファン・ファイ・レは、ベトナムの伝統文化には明らかな「本質と特色 (bản lĩnh, bản sắc)」がある一方で、儒教思想など、人々を統治するために封建階級が取り入れた要素が、人々にも影響を与えており、そこが伝統文化の「限界 (hạn chế)」であるとした [Phan Huy Lê 1979: 68]。ファンは、ベトナムの「伝統文化の実質と民族文化の主要な基礎は民間文化にある」と表現した [ibid.: 67]。歴史学者として文化に関する研究も行い、後に(1989年からの第2期執行部)民間文芸会副総書記となったチャン・クオック・ヴオンは、ベトナムの封建王朝の宮廷文化は、「村落文化 (văn hoá làng xóm)」を拡大したものか、中華文化 (văn hoá Trung Hoa) を引き写したもの」にすぎず、「ベトナム文化」の主体は「民間文化」だったとした [Trần Quốc Vượng 1979: 73]。上記3つの論考に共通するのは、歴史として抽象的に「ベトナム文化」を語る中で、その起源や本質を「村落文化」や「民間文化」に求めていたことである。つまりこの時期、中国への対抗として、「ベトナム文化」の歴史と伝統を強調する必要があった。そのため、現代に伝わる過程で封建的、「旧体制的」要素の影響を受けた(ファンが言うところの伝統文化の「限界」が露呈した)民間文芸とは別次元で、歴史的文脈から、いわば理論上の民衆の文化を語る必要があり、その用語の1つとして民間文化が使用されたと考えられる。

民間文芸収集の意義が否定されたこの時期、同時に、研究者たちは、現代の創作や文化活動とは切り離れたところにフォークロアを位置づけ、理論の研究や学術性の追求へと向かうことで、フォークロア研究の価値を示そうとしていた。民族学院で少数民族の民間文学も研究したダン・ギエム・ヴァン (Đặng Nghiêm Vạn) は、1981年、「民間文芸会は活動を停止したが、今その事業は継続しなければならない」[Đặng Nghiêm Vạn 1981: 8]とし、次のように論じた。

注意すべき1つの現象は、現在の民間文芸作品は現代化、「社会主義化」が著しく行われていることである。語る人から収集する人に至るまで、「人民性」「階級性」さらに「党性」までも含んだ時代に合うものになるよう、細部において省略や加筆を行っている。警戒すべきなのは、少数民族の民間文芸の口承作品は、その風格と一部の内容においてすで

に民族性³⁶⁾を失っていることである。[*ibid.*: 12]

ダン は 民間文芸収集の方法を批判し,³⁷⁾ 学術研究としては(手を加えない)「原版」を尊重し、資料として検討を加えるべきであると主張した [*ibid.*: 13]。民間文学研究者のダン・ヴァン・ルン (Đặng Văn Lung) は、一般的理論、民間文芸の歴史、民間文芸の起源や取り巻く環境の与えた影響、文献 (văn bản) などを研究すべきであり、そうしなければ「この分野の任務は薄れる」、民間文芸研究の方法論のみを検討することが、この分野を学術 (khoa học) とするために必要であるとした [Đặng Văn Lung 1979: 8]。さらに、民間文化院の設立に先駆けて 1982 年 10 月に開かれた「第 5 回党大会の光の下で民間文化文芸に関する活動 (công tác) の質を向上させる」会議では、学術界の重鎮ファム・ファイ・トン (Phạm Huy Thông) も、現在の収集方法は学術性を欠いているとし、資料が「真実で正確 (chân xác, 真確) であること」が必要であるとも説いた [Phạm Huy Thông 1983: 48-49]。南北統一後から続く「改編」志向のさらなる高まりの中で、そして民間文芸収集の意義が否定されたことで、研究者たちはこれまでの路線から距離を置いて見るようになり、自省を行ったのではないか。フォークロア研究の新たな道の模索から、学術としてその存在意義を高めてゆくべきとの意見が出てきたといえる。

上記のファムは、新たな研究で使用する用語に関して、民間文化の用語を使用すると民族学と混同するので、³⁸⁾ 民間文芸とする方がよいが、そうすると今度は「文芸」(原文も括弧付き)³⁹⁾ が創作も含意してしまう。よって、文化芸術 (văn hoá nghệ thuật) とするのがよいのではないかと提起している [*ibid.*: 47]。文化芸術を用語として推すファムの意見は結局採用されていない。しかし文化芸術であれ民間文化であれ、民間文芸以外の用語を新たに使用することが、創作を含意する「文芸」から離れるために必要と考えられていたことがわかる。この創作を含意する「文芸」を避け、新たな用語を用いて研究を行う必要性は、ここまで述べたように、中国の影響の排除、「ベトナム文化」の歴史と伝統の強調、理論や学術性の追求という複合的な要因から出てきたものとまとめることができる。そして現代の創作や文化活動と

36) これは少数民族の「エスニックな」要素を指すと考えられる。

37) 既述の通り、民間文芸会設立時、ハ・ファイ・ザップは、「支配階級的思想や迷信異端は、民間文芸に影響を及ぼしている要素にしかすぎ」ないとしていたように、問題のある部分の排除は求められていたが、全面的な「改編」を必ず行わなければならないとはされていなかった。それに対し、1970 年代後半では、大幅な「改編」が主張され、先述のト・ゴク・タインが言うように「ヨーロッパの古典芸術の原理」まで導入したものとなっていた。この極度の「改編」志向に対し、研究者たちが危機感を抱いたと考えられる。

38) こうした他領域との重複について、ディン・ザー・カインは民間文化研究があくまで個別の学問領域であるとし、「審美」の観点から現象に迫るものであるとした [Đinh Gia Khánh 1983a: 57]。

39) ここで括弧付きの「文芸」は、ファムが使用している文脈から現代の(大衆や職業作家と芸術家の)創作への応用を含意するものとする。

は切り離した歴史の文脈で「ベトナム文化」を語る中で用いられた民間文化が、フォークロア研究の用語として採用されたものと考えられる。

1982年には、民間文芸会も活動を再開したが、その際には「過去に関わる微妙な (tế nhị) 問題」もあり、民間文化を冠した新たな会に生まれ変わることも検討されていたという [Phan Đăng Nhật 1999: 15]。結局、同会の名称変更は行わず、民間文化院と同じ建物に入り [ibid.: 16]、活動をともにすることで活動再開を図ったと見られる。⁴⁰⁾ さらに活動再開時はもともと所属していたベトナム文化芸術各会連盟ではなく、科学技術各会連盟 (Liên hiệp các hội khoa học kỹ thuật) の所属となった [Nguyễn Nghĩa Dân 2007: 152]。このことも、新たに始まった民間文化研究と「文芸」との距離を示している。この時期以降、特に民間文芸会に関わる場面では、民間文化のほかに、民間文化文芸 (văn hoá văn nghệ dân gian) という用語も用いられることがあるが、これも間に「文化」を入れて、民間文芸の含意を刷新しようとしたものであるといえる。

3. 民間文化院での研究 (1983～80年代末)

民間文化院の設立に向けて奔走したディン・ザー・カインは、同院設立後、民間文化の位置づけを次のように示した。

我々が現在建設している社会主義的文化は、4,000年にわたる民族の歴史が残した文化遺産の中で最も美しい価値を継承し発揮している。/その文化遺産は労働者の創造の成果である民間文化、そして民族知識人の創造の成果である博学文化を含んでいる。/ベトナム民族の歴史はベトナム文化の歴史であり、民間文化が非常に重要な要素であり、民族文化の主要な要素であることを肯定させてくれる。[Đinh Gia Khánh 1983b: 13] (／は原文での改行)

このように現代の創作や文化活動から離れた局面に民間文化を置き、歴史として語った。1982年3月の第5回党大会政治報告では、「新しい文化は、ベトナムの心とベトナムの文化の4,000年の伝統の中で、最も美しいものを集めて新たな高みへと上げる」[Lê Duẩn 1984: 125]とされ、「ベトナム文化」の伝統が改めて強調された。民間文化研究は、この伝統を肯定するための学問として位置づけられたといえる。

また「マルクス・レーニン主義民間文化研究 (Khoa Nghiên cứu Văn hoá dân gian Mác-xít Lê-nin-nít)」[Đinh Gia Khánh 1983b: 19]として理論的研究が重視されたのもこの時期の特徴

40) また民間文芸会が活動を再び活発化させたのは1989年に第2回大会を開催して以降である。

である。⁴¹⁾ 民間文化院設立直後からの1980年代、民間文化院発行の学術雑誌『民間文化』を中心として、「フォークロア」とは何か、「フォークロア学 (folklore học)」とは何かという自己規定に関わる論考が相次いで出された (例えば [Ngô Đức Thịnh 1987])。これも民間文化研究における学術性の追求の表れと捉えることができる。ドイモイ以後の対外開放の動きも重なっているのだろうが、民間文化院では、各国のフォークロアに関する定義をベトナム語訳し、数百の定義を得たとされており [Ngô Đức Thịnh 1988: 14]、社会主義諸国だけでなく世界の研究動向にも関心が向けられた。定義の検討の成果は、『フォークロアに関する観点』[Viện Văn hoá dân gian 1990] として出版されており、アメリカ、ヨーロッパ、(旧)ソビエト連邦などから幅広く資料を集めている。一方、中国の文献では、孔子、衛宏 (漢代)、鍾榮 (南朝梁)、王世貞 (明代)、馮夢龍 (明代) と古い学者や文筆家のものが多い。その次に魯迅 (1881~1939 年) が登場し、そして中華人民共和国建国後の時期では、文学者の郭沫若の1950年の中国民間文芸研究会設立時のスピーチ、民間文学研究者の賈芝が1960年に中国の雑誌『民間文学』に発表した論考の2点から申し訳程度に引用を行っているのみである [ibid.: 98-101]。現代中国をモデルとした民間文芸収集から「西側」の研究成果も取り入れた民間文化研究への転換が図られていたことがここからもわかる。

IV 1990年代以降の民間文化に関する収集・研究の活発化

1. 「民族文化」再評価の動き (1990年代)

ドイモイ路線の採択により、文化領域においても規制緩和が行われるとともに、特に1990年代に入り経済発展の原動力や経済発展に伴うマイナス面を調整するものとして文化の役割が注目された。1991年第7回党大会では、「先進的で民族色の濃い文化」の建設が方針として打ち出され、第7期党中央委員会第4回総会決議以降、「民族文化」保存の動きが顕著に高まった。同決議では、「民族色」の保持のための具体的方針の中に、各民族の民間文化の紹介も盛り込まれた [今井 2002: 95, 97-98]。また、ユネスコは1990年代初頭から無形文化遺産の保護を提唱し始めたが、その保護の枠組みを試行的に具現化する国として選ばれたのがベトナムだったとされている [白石・三田 2013: 264]。ユネスコによる無形文化遺産の保護の枠組みは、1989年の「伝統文化及びフォークロアの保護に関する勧告」に遡ることができるとされており [阿曾村 2013: 284]、ここからも民間文化に対する政策的関心が高まった。

1989年には、民間文芸会が第2回大会を開催し、再び活動を活発化させ、1991年には、科

41) しかし、「西側」を含む各国の学説に接したこと、国際環境の変化もあり「マルクス・レーニン主義」の部分は次第に強調されなくなっていくように見受けられる。この点は詳しい学説の検討が必要であり、今後の課題としたい。

学技術各会連盟から文化芸術各会連盟へと復帰した [HVNgDGVN 1994: 16]。民間文芸会は 1993 年から会員の優れた収集活動の成果の顕彰を、また 1999 年から会員の収集活動に対する援助をそれぞれ国から支給された経費で行うようになるなどし、民間文化文芸⁴²⁾の収集が盛んに展開された。1990 年代には、各地で「民間文化文芸の維持と振興」を主題とする会議も開催された [Tô Ngọc Thanh 2007a: 21-22]。民間文化研究院 (Viện Nghiên cứu Văn hoá dân gian, 1993 年に民間文化院から改称) も、例えばバビ・ドンモ地域 (Ba Vì-Đồng Mô, 旧ハタイ省内) の観光文化村 (làng văn hoá du lịch) 建設の提案に関わる活動を行う、ゾンホ (父系血縁集団) や祭礼の現代的意義などを主題とした研究が盛んになるなど [Nguyễn Duy Quý 2003: 284], 「民族文化」再評価の流れに合わせた、実践的な研究を重視する方向へと向かった。

2. 文化遺産法制定以後 (2001 年～)

2000 年代に入ると、民間文芸会では、民間文化文芸の継承者が高齢化する中、若い世代にそれが伝承されていないことに対する危機感が高まった [Ban chấp hành ... 2005: 40-41]。2001 年には、文化遺産法 (Luật Di sản Văn hoá) が制定され、無形文化遺産の保護に関する規定も設けられた。文化遺産法における無形文化遺産の定義は、「歴史、文化、科学的価値を有する精神の産物で、記憶、文字により維持され、口承、技能の伝承 (truyền nghề), 上演やその他の保存、伝承形態により継承されるものであり、言語、文字、文学作品、芸術、科学、口承言語文学 (ngữ văn truyền miệng),⁴³⁾ 民間の歌舞音曲、生活方法、生活様式、祭礼、伝統工芸に関する秘伝、古典医薬学、飲食文化、民族の伝統服飾に関する知識やその他の民間知識を含む」[Nhà xuất bản Chính trị quốc gia 2006: 12-13] とされている。民間文化 (あるいは民間文化文芸) と呼ばれてきた対象が、無形文化遺産として保護されることになった。しかし、無形文化遺産に関する記述は「奨励する」「条件を整える」など、具体性を欠いたものが多かった。草稿を前にした学術会議で民間文芸会総書記のト・ゴク・タインは、草稿は有形文化遺産の保存や博物館行政のためのものであり、無形文化遺産はまるで付録扱いであると不満を示していた [Tô Ngọc Thanh 2001b: 91]。曖昧な文化遺産法を見た民間文芸会は自ら具体的な方策を講じることを決意したと見られ、2002 年から民間文芸会は民間文化文芸の継承者を「民間芸能家 (Nghệ nhân dân gian)」として認定顕彰する制度を開始した。⁴⁴⁾ 加えて、同会地

42) 民間文芸会は、民間文化と民間文芸を合わせた民間文化文芸を一般的に用いるようになった。

43) 「ngữ văn truyền miệng」を本稿では口承言語文学と訳した。「ngữ văn」は、「言語」と「文学」両方を含むとされている [Vũ Ngọc Khánh and Phạm Minh Thảo 2005: 847]。音声を書き取ったテキストではなく、音声そのものに注目する意味で「民間文学」ではなくこちらを使用していると推測される。

44) 草稿を前にした学術会議でトは、「人民芸能家」「優秀芸能家」等の名称で、無形文化遺産の継承者

方支部を動員して「民間文化文芸遺産」を目録化すること、青少年への民間文化文芸の伝承等を目指した「展望 2010 年 (Tầm nhìn 2010)」計画を展開した [Tô Ngọc Thanh 2007a: 24-25, 27]。上記の取り組みにおいて、民間文芸会は、民間文化文芸を無形文化遺産とほぼ同じ意味で使用している。例えば、民間文芸会が発行した「民間芸能家」の一覧 [HVNgDGVN 2007] では、「無形文化遺産は主に民間文化である」 [Tô Ngọc Thanh 2007b: 17] との記述がある。そして同会は無形文化遺産、英語の「folklore」、民間文化文芸が、いずれも生産文化、社会文化、生活文化、精神文化、芸術文化により構成されるとし、類似した説明を当てている [ibid.: 16-17, 23-24; HVNgDGVN 2010: 5-6]。また「民間芸能家」制度は、ユネスコが 1993 年以降、加盟各国に国内での整備を呼びかけた、無形文化遺産の継承者保護のための「人間財宝 (Living Human Treasures)」制度の代替として設けたものであるといえる。⁴⁵⁾

このように、特に 2000 年代以降、無形文化遺産の保護という国際的枠組みを参照するかたちで、民間文化文芸の保護が語られるようになった。そして民間文芸会は、国内の文化政策の流れへの対応に留まらず、政策に先駆けて独自の活動を展開するようになった。⁴⁶⁾ 一方で民間文化研究院は、2004 年に国家人文社会科学センターがベトナム社会科学院へと再編された際、文化研究院 (Viện Nghiên cứu Văn hoá) に改称し [Cộng Hoà Xã Hội Chủ Nghĩa ... 2004: 79]、民間文化を冠した研究院はなくなった。⁴⁷⁾ 文化研究院の任務には、文化政策に貢献する学術的考察、無形・有形文化遺産の調査と収集、保存、振興なども含まれており [ベトナム社会科学翰林院 (ベトナム社会科学院から改称) ウェブサイト]、同院に、民間文化に限定されず、より広範な文化政策への寄与が期待されるようになった。民間文化院の場合、民間文芸会とは逆に「民間文化」の看板を外すことで、取り扱う対象を、無形文化遺産をはじめとする文化遺産へと近づけたともいえる。

を顕彰することを提案していたが [Tô Ngọc Thanh 2001b: 90]、完成した文化遺産法では、継承者を (何らかの形で) 顕彰するとは記載されているものの、具体的な制度は定められていなかった。

45) 「民間芸能家」の一覧 [HVNgDGVN 2007] の表紙には、「Vietnam's Living Human Treasures」との英語が付されている。

46) この点については、ドイモイ以後の大衆組織に対する政策も勘案する必要がある。1990 年 3 月の党中央委員会 8 号議決では、大衆組織に対する規制緩和 (人事、予算や活動内容等) が行われた。その後 1998 年には、その揺り戻しとして、大衆組織の党との関係の明白化が求められた。それを受けて 2000 年には民間文芸会と所属するベトナム文学芸術各会連盟全体で、組織の性質を社会職業組織から政治社会職業組織へと変更している [Vasavakul 2003: 33, 36]。民間文芸会は、この組織の性質の変更の目的を、第 8 回党大会と党中央執行委員会第 5 回総会議決で示された「先進的で民族色豊かな文化の建設」の実現という新たな任務を果たすためと説明している [HVNgDGVN 2000: 41]。政治社会職業組織となったことで、政府による「文学芸術各会中央部のための創作支援プログラム」など、連盟や下部組織に対して資金面でのさらなる配慮も行われるようになったと見られる。民間文芸会の展開した「展望 2010 年」計画には、同プログラム枠で得た資金も使用されている [Ban chấp hành ... 2005: 41-42]。

47) 同院が発行する学術雑誌名としては『民間文化』が残っている。

V お わ り に

以上では、社会主義ベトナムにおけるフォークロアの収集と研究が、時期ごとに文化政策といかに関わってきたのかを、「フォークロア」に当たる漢越語の変遷に着目して考察した。

1950年代半ばに始まった民間文学研究は、当初、限られた資料を用いた研究者の営みとして行われていたが、1950年代末からの大衆文化政策の強化から民間文学に対する政策的関心が高まり、地方における収集へと発展した。党が社会主義的改造を本格化させ、それに資するものとして大衆による文芸活動を運動化しようとする中で、文学と芸術を合わせて指導する必要性が認識され、1966年の民間文芸会の設立と民間文芸収集の提唱につながった。ベトナム戦争の激化に伴い、大衆文化政策の重要性が増す中、大衆による収集活動それ自体が、文芸活動への大衆の動員と見なされていた。そしてこの時期、フォークロア収集は大衆や職業作家と芸術家による創作と文化活動への応用が主要な目的とされた。

1970年代後半、ベトナム戦争終結後の南部の社会主義的改造の要請から、文化領域における「旧体制的」要素の排除が強く主張された。民間文芸も「旧体制的」と評価され、収集が停滞するとともに、「改編」志向が高まっていた。さらに1978年以降、中越関係が極端に悪化すると、中国による支配の名残とされる「封建的思想」や中国の影響を排する動きが強まった。ここから「封建的思想」を含むとされ、政策的枠組みとしても中国色を感じさせる民間文芸の収集は、その存在意義をさらに否定されるようになったと考えられる。それと同時に、中国への対抗として、「ベトナム文化」の歴史と伝統を誇るために展開された、その起源や本質に関する抽象的な議論においては、現代とは切り離れた歴史的文脈から民衆の文化を語る必要があった。また、民間文芸に対する否定的評価と「改編」志向に直面した研究者たちからは、フォークロアの理論的研究、学術性の追求へと向かうべきだという意見が出された。これら複数の要素が重なり、現代の創作や文化活動とは切り離れたところにフォークロアを位置づけた民間文化が、「フォークロア」に当たる用語として広く使用されるようになった。民間文芸収集から、フォークロアの歴史性と理論に重点が置かれ、学術性を求めた民間文化研究への刷新が図られた。

このように、文化政策上の方針が、用語の変遷、そしてその収集と研究の方向転換に明らかに影響していた。民間文学から民間文芸へ、そして民間文化へというキーワードの変遷は、収集や研究の対象の拡大に留まらず、フォークロア収集や研究の目的、現代における創作や文化活動との関わり方の変化をも伴うものだった。

その後1990年代以降、特に文化遺産法が成立した2000年代に入り、無形文化遺産の概念が民間文化、民間文化文芸と深く関わるようになった。そこで民間文芸会は、無形文化遺産を民

間文化文芸と読み替えて活動を行ったのに対し、民間文化研究院は文化研究院になることで対応した。そのいずれの場合においても、民間文化あるいは民間文化文芸という用語の存在意義が揺らいでいるといえる。

さらに、2009年に文化遺産法修正法が出されて以降、無形文化遺産の保護のための国内制度の整備が進んでいる。2010年6月の文化体育観光省第4号通達に基づき〔法務省ウェブサイト〕、省・中央直属市ごとに文化体育観光局が中心となって、無形文化遺産の調査と目録化が行われつつある。2012年には、国家無形文化遺産 (di sản văn hoá phi vật thể quốc gia) の一覧表を作成する制度が開始され、そこに記載する項目の第1期認定が行われた。2012年10月の文化体育観光省大臣第4137号決定では、国家無形文化遺産の一覧表への記載項目を審査する審査会の委員13名の名簿が発表されているが、この中には民間文芸会を代表して入っている委員はいない。⁴⁸⁾ 同じく大衆組織である文化遺産会 (Hội Di sản văn hoá, 2004年設立) からは2名が選出されているのとは対照的である〔文化体育観光省ウェブサイト〕。2001年の文化遺産法制定前には、草稿を前にした学術会議に民間文芸会総書記が民間文化研究院院長とともに招かれており、無形文化遺産の保護に関する条項について意見を述べていた [Ủy ban Văn hoá, giáo dục ... 2001: 5]。そしてその後、無形文化遺産の保護に関連した活動を積極的に進めてきた民間文芸会であったが、この審査会の委員の人選を見ると、文化体育観光省を中心に構築されつつある無形文化遺産の保護に関する国内的枠組みの中で、民間文芸会の立場は必ずしも安泰ではない。文化体育観光省は、ユネスコに提出した報告書の中で、民間文芸会による「民間芸能家」制度、独自の目録化に関して、「いくつかの成果をあげている一方で、他の政府機関との協力や情報交換が不足している」としている [UNESCO 2012: 16]。こうした民間文芸会の独自路線に対する文化体育観光省の評価が、民間文芸会の政策的位置づけに影響を与えているように見受けられる。2014年6月には新たに政府第62号議定により、無形文化遺産の優れた継承者を「人民芸能家 (nghệ nhân nhân dân)」 「優秀芸能家 (nghệ nhân ưu tú)」として国家が顕彰する制度が実働することになった〔ベトナム政府ウェブサイト〕。今後、民間文芸会による「民間芸能家」制度が、国家によるこの制度とどのように併存してゆくのかも注目される。⁴⁹⁾ 一方で、民間文芸会は、政府予算に基づく「ベトナム各民族文化文芸資産の出

48) 委員の中に民間文芸会の会員ともなっている人間がいることは十分考えられるが、名簿の肩書としては民間文芸会の名前は出てこない。文化研究院からは1名が選ばれている。なお、研究院として、無形文化遺産の保護の枠組みに最も深く関わっているのは、文化体育観光省直轄のベトナム文化芸術院 (Viện Văn hoá nghệ thuật Việt Nam) と音楽院 (Viện Âm nhạc) で、この2院はユネスコの無形文化遺産に関する各種「一覧表」への記載 (いわゆる「無形文化遺産への登録」) のための申請書類の執筆に直接携わっている。

49) 国家による「人民芸能家」「優秀芸能家」の顕彰は、2009年の文化遺産法修正法に明記されていたが、その実施までに時間を要した。同制度は文化体育観光省が主管するものであるが、2009年の時点で工商省が手工芸の継承者を対象にした同名の制度をすでに実施していた。手工芸も無形文化遺産

版と広報」計画では中心的役割を果たしており、2008 年からの 10 年間で 2,000 件の出版が予定されている [大泉 2014: 31]。収集と出版という従来から関わってきた分野で民間文芸会が役割を果たしてゆくことは変わらないだろう。民間文化あるいは民間文化文芸という用語の意義が今後どう移り変わるかは、こうした民間文芸会の組織としての動きとも関わると考えられる。

謝 辞

本稿で参照した文献の一部は、平成 21 年度笹川科学研究助成、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号：22・9979）の助成を受けて収集したものです。

参 考 文 献

日本語

- 阿曾村智子. 2013. 「文化多元主義的な世界における『人類の共通遺産』の普遍的価値について——ギリシャの事例」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』12: 279-301.
- 古田元夫. 1995. 『ベトナムの世界史——中華世界から東南アジア世界へ』東京：東京大学出版会.
- 今井昭夫. 2002. 「ドイモイ下のベトナムにおける包括的文化政策の形成と展開」『東京外国語大学論集』64: 89-107.
- 伊藤正子. 2003. 『エスニシティ〈創生〉と国民国家ベトナム——タイ族・ムン族の近代』東京：三元社.
- . 2008. 『民族という政治——ベトナム民族分類の歴史と現在』東京：三元社.
- 岩竹美加子. 1996. 「はじめに」『民俗学の政治性——アメリカ民俗学 100 年目の省察から』岩竹美加子（編訳）、9-61 ページ所収。東京：未来社.
- 川口健一. 2000. 「ベトナム現代『大衆文学』の行方」『総合文化研究』3: 53-59.
- 子安加余子. 2005. 「近代中国と民俗学——周作人・江紹原・顧頡剛」『福井大学教育地域科学部紀要 I（人文科学 国語学・国文学・中国学編）』56: 21-42.
- 栗原浩英. 1988. 「ベトナム労働党の文芸政策転換過程（1956 年～58 年）——社会主義化の中の作家・知識人」『アジア・アフリカ言語文化研究』36: 1-26.
- . 2011. 「ベトナム社会主義における『人間』の位置」『社会主義的近代化の経験』小長谷由紀；後藤正憲（編）、186-206 ページ所収。東京：明石書店
- 大泉さやか. 2014. 「社会主義ベトナムにおける少数民族の民間文学の収集と出版——ムオン人のモを事例として」『東南アジア——歴史と文化』43: 23-43.
- 岡 益巳. 1997. 「開放政策下の流行り謡の特徴」『岡山大学経済学会雑誌』28(4): 171-202.
- 坂内徳明. 1978. 「ソ連民俗学の現在」『民族学研究』42(4): 356-368.
- 白石昌也；三田翔平. 2013. 「翻訳：『ベトナム文化遺産法』（2001 年）、同『修正法』（2009 年）」『アジア太平洋討究』21: 259-294.

↙

産の一部だとする文化体育観光省は、手工芸も包括した制度を構想したが、工商省は手工芸分野に関して自らが管轄することを譲らず、交渉が決裂したことなどが、同制度の実施を遅らせていたとされる [『労働新聞』電子版 2013.4.21]。結局、上記の政府第 62 号議定による制度では、対象が言語、口承言語文学、民間の歌舞音曲、社会習慣と信仰、伝統的祭礼、民間知識の継承者となっており、手工芸は含んでいない。

中国語

刘锡诚. 2006. 『20 世纪中国民间文学学术史』 河南：河南大学出版社.

王文宝. 2006. 「关于“中国民俗学会”——纪念中国民俗学会成立 20 周年」『民俗春秋——中国民俗学会 20 周年纪念论文集』中国民俗学会（編），46-52 ページ所収. 北京：學苑出版社.

英語・フランス語

Bui, Thanh Van. 1937. *Quelques Essais de Folklore du Centre-Annam*. Hue: Imprimerie Doc-Lap.

Marr, David. G. 1988 [1981]. *Vietnamese Tradition on Trial, 1920-1945*. Berkeley and London: University of California Press.

Meeker, Lauren. 2013. *Sounding Out Heritage: Cultural Politics and the Social Practice of Quan Họ Folk Song in Northern Vietnam*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Nguyen, Phong T. 1991. Ethno-Historical Perspectives on the Traditional Genres of Vietnamese Music. In *New Perspectives on Vietnamese Music*, edited by Phong T. Nguyen, pp. 1-19. New Haven: Council on Southeast Asian Studies, Yale Center for International and Area Studies.

———. 2007. "Our Songs Can Drown Out the Bomb!": Musical Change in Vietnam since the War. In *Authenticity and Cultural Identity: Performing Arts in Southeast Asia*, Senri Ethnological Reports 65, edited by Yoshitaka Terada, pp. 147-165. Osaka: National Museum of Ethnology.

Ninh, Kim N. B. 2002. *A World Transformed: The Politics of Culture in Revolutionary Vietnam, 1945-1965*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Pelley, Patricia M. 2002. *Postcolonial Vietnam: New Histories of the National Past*. Durham: Duke University Press.

Salemink, Oscar. 2003. *The Ethnography of Vietnam's Central Highlanders: A Historical Contextualization, 1850-1990*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

———. 2013. Appropriating Culture: The Politics of Intangible Cultural Heritage in Vietnam. In *State, Society and the Market in Contemporary Vietnam: Property, Power and Values*, edited by Hue-Tam Ho Tai and Mark Sidel, pp. 158-180. London and New York: Routledge.

Taylor, Phillip. 2003. The Goddess, the Ethnologist, the Folklorist and the Cadre: Situating Exegesis of Vietnam's Folk Religion in Time and Place. *The Australian Journal of Anthropology* 14(3): 383-401.

UNESCO. 2012. *Periodic Report No. 00792/ Viet Nam: Report on the Implementation of the Convention and on the Status of Elements Inscribed on the Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity*. Unpublished paper: <http://www.unesco.org/culture/ich/doc/download.php?versionID=18524> (最終アクセス 2014/6/5). 51p.

Vasavakul, Thaveeporn. 2003. From Fence-Breaking to Networking: Interests, Popular Organizations and Policy Influences in Post-Socialist Vietnam. In *Getting Organized in Vietnam: Moving in and around the Socialist State*, edited by Benedict J. Tria Kerkvliet, Russell H. K. Heng and David W. H. Koh, pp. 25-51. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

ベトナム語

Ban chấp hành Hội Văn nghệ dân gian khoá IV, ed. 2005. Báo cáo tổng kết công tác nhiệm kỳ Đại hội bốn (2000-2005) và phương hướng công tác nhiệm kỳ Đại hội V (2005-2010) Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam. In *Kỷ yếu Đại hội V*, edited by Hội Văn nghệ dân gian, pp. 37-66. Hà Nội: Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam.

Bùi Văn Nguyên. 1978. Con người mới xã hội chủ nghĩa Việt Nam: Chống tàn dư của tư tưởng phong kiến. *Tạp chí Cộng sản* số 10-1978: 59-64.

Cao Huy Đình. 1968. Từ văn nghệ dân gian đến văn nghệ xã hội chủ nghĩa. *Tạp chí Văn học* số 2, 3-1968: 56-64.

Cao Huy Đình; Nguyễn Đồng Chi; and Đặng Nghiêm Vạn. 1969. *Phương pháp sưu tầm văn học dân gian ở nông thôn*. Hà Nội: Vụ Văn hoá quần chúng xuất bản.

Cộng Hoà Xã Hội Chủ Nghĩa Việt Nam, Cục Văn hoá quần chúng, ed. 1987. *Những văn kiện của Đảng và Nhà nước về công tác văn hoá quần chúng*. Hà Nội: Cục Văn hoá quần chúng. 314p.

- . Chính Phủ. 2004. Nghị định của Chính phủ số 26 ngày 15 tháng 1 năm 2004: Quy định chức năng, nhiệm vụ quyền hạn và cơ cấu tổ chức của Viện Khoa học xã hội Việt Nam. *Văn hoá dân gian* số 1-2004: 78-80.
- Đặng Nghiêm Vạn. 1981. Một vài ý kiến cần thảo luận xung quanh vấn đề văn nghệ dân gian. *Tạp chí Văn học* số 4-1981: 7-13.
- Đặng Văn Lung. 1979. Từ nhiệm vụ mà bàn thêm về phương pháp nghiên cứu văn nghệ dân gian. *Tạp chí Nghiên cứu Nghệ thuật* số 6-1979: 3-8.
- Đinh Gia Khánh. 1966. Tầm quan trọng của văn học dân gian và một số kinh nghiệm trong công tác sưu tập. In *Những ý kiến về văn học dân gian Việt Nam phát biểu trong Hội nghị sưu tập văn học dân gian toàn miền Bắc*, edited by Tổ Văn học dân gian các dân tộc, pp. 98-117. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học.
- . 1983a. Văn hoá dân gian hay Fôn-klo là gì? *Văn hoá dân gian* số 1-1983: 56-58.
- . 1983b. Mục đích và ý nghĩa của việc nghiên cứu văn hoá văn nghệ dân gian. *Văn hoá dân gian* số 1-1983: 13-22.
- . 1991. Ý nghĩa xã hội và chính trị của việc nghiên cứu văn hoá dân gian. *Văn hoá dân gian* số 2-1991: 5-10.
- . 1995. *Văn hoá dân gian Việt Nam: Với sự phát triển của xã hội Việt Nam*. Hà Nội: Nhà xuất bản Chính trị Quốc gia.
- Đoàn Tùng. 1976. Mấy kinh nghiệm về động viên các cộng tác viên nghiệp dư. In *Để đẩy mạnh hoạt động văn nghệ dân gian: Kỷ yếu hội nghị bồi dưỡng kinh nghiệm sưu tầm văn nghệ dân gian toàn miền Bắc 9-1975*, edited by Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam, pp. 42-45. Thanh Hoá: Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam.
- Dương Quảng Hàm. 1968 [1941]. *Việt-Nam văn-học sử-yếu*. Sài Gòn: Bộ Quốc gia giáo dục xuất bản.
- Hà Châu. 2003. Thành tựu sưu tầm nghiên cứu vốn văn nghệ dân gian của các tộc người ở Việt Nam nửa cuối thế kỷ XX. In *Dân tộc học Việt Nam: Thế kỷ XX và những năm đầu thế kỷ XXI*, edited by Khổng Diên and Bùi Minh Đạo, pp. 479-499. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Hà Huy Giáp. 1969. Coi trọng vốn văn nghệ quần chúng trong sự nghiệp xây dựng một nền văn nghệ mới. In *Những ý kiến về văn học nghệ thuật dân gian Việt Nam*, edited by Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam, pp. 35-49. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Hà Văn Tấn. 1979. Bàn thêm về cội nguồn lịch sử của đặc điểm văn hoá Việt Nam. *Tạp chí Cộng sản* số 11-1979: 68-71.
- Hà Xuân Trường. 1980. Văn nghệ ta phấn đấu vì sự nghiệp của Đảng. *Tạp chí Cộng sản* số 3-1980: 22-30.
- Hoa Bằng. 1956. Khảo luận về truyện Thạch Sành. *Tập san Văn Sử Địa* số 16: 63-72.
- Hoài Thanh. 1969. Về công tác sưu tầm, nghiên cứu và giới thiệu văn nghệ dân gian các dân tộc Việt Nam. In *Những ý kiến về văn học nghệ thuật dân gian Việt Nam*, edited by Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam, pp. 9-34. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Hoàng Tiến Tựu. 1966. Công tác sưu tập văn học dân gian của trường Đại học Sư phạm Vinh và mấy suy nghĩ nhỏ. In *Những ý kiến về văn học dân gian Việt Nam phát biểu trong Hội nghị sưu tập văn học dân gian toàn miền Bắc*, edited by Tổ Văn học dân gian các dân tộc, pp. 118-131. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học.
- HVNgDGVN (Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam), ed. 1969. *Những ý kiến về văn học nghệ thuật dân gian Việt Nam*. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- . 1974. *Những ý kiến xây dựng về văn nghệ dân gian Việt Nam: Tài liệu tham khảo*. Hà Nội: Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam. 110p.
- . 1994. *Các nhà Folklore học Việt Nam*. Tập 1. Hà Nội: Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam. 196p.
- . 2000. *Kỷ yếu Đại hội IV*. Hà Nội: Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam. 427p.
- . 2007. *Nghệ nhân dân gian: Vietnam's Living Human Treasures*. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội. 207p.
- . 2010. *Tổng kiểm kê di sản văn nghệ dân gian của 54 dân tộc Việt Nam: Thực hiện kế hoạch tầm nhìn 2010*. Hà Nội: Nhà xuất bản Đại học quốc gia Hà Nội. 271p.
- Kiều Thu Hoạch. 1992. Dân gian văn nghệ học Trung Quốc những năm 80. *Văn hoá dân gian* số 2-1992:

- 27-31.
- Lê Duẩn. 1984. *Về xây dựng nền văn hoá mới con người mới xã hội chủ nghĩa*. Hà Nội: Nhà xuất bản Sự thật.
- Lê Huy. 1966. Ngành văn học và ngành âm nhạc cần cộng tác chặt chẽ để tiến hành công tác sưu tập dân ca Việt Nam. In *Những ý kiến về văn học dân gian Việt Nam phát biểu trong Hội nghị sưu tập văn học dân gian toàn miền Bắc*, edited by Tổ Văn học dân gian các dân tộc, pp. 176-181. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học.
- Ngô Đức Thịnh. 1987. Xung quanh việc xác định đối tượng, chức năng của ngành Folklore học Việt Nam. *Văn hoá dân gian* số 4-1987: 17-21.
- . 1988. Nghiên cứu những vấn đề lý luận trong Folklore học. *Văn hoá dân gian* số 3&4-1988: 13-20.
- Ngô Văn Lê; and Nguyễn Văn Tiếp. 2003. Bàn thêm về mối quan hệ giữa dân tộc học và các ngành Khoa học xã hội và nhân văn. In *Dân tộc học Việt Nam: Thế kỷ XX và những năm đầu thế kỷ XXI*, edited by Khổng Diễn and Bùi Minh Đạo, pp. 108-115. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Nguyễn Duy Quý, ed. 2003. *Trung tâm Khoa học xã hội và nhân văn quốc gia: 50 năm xây dựng và phát triển*. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Nguyễn Đồng Chi. 1974 [1957]. *Kho tàng truyện cổ tích Việt Nam*. Tập 1. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Nguyễn Nghĩa Dân. 2007. Hội ta: Buồn vui 40 năm ấy... In *Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam 40 năm xây dựng và trưởng thành*, edited by Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam, pp. 151-159. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Nguyễn Xuân Kinh, ed. 1993. Những ý kiến về văn hoá dân gian và các tổ chức nghiên cứu Folklore. *Văn hoá dân gian* số 1-1993: 3-7.
- . 2001. Một thế kỷ sưu tầm, nghiên cứu văn hoá, văn nghệ dân gian Việt Nam. In *Một thế kỷ sưu tầm nghiên cứu văn hoá văn nghệ dân gian*, edited by Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam, pp. 41-69. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hoá-thông tin.
- . 2009. Quá trình sưu tầm và nhận thức lý luận đối với sử thi ở Việt Nam. In *Sử thi Việt Nam trong bối cảnh sử thi Châu Á*, edited by Viện Khoa học xã hội Việt Nam and Ủy ban nhân dân tỉnh Đắk Lắk, pp. 27-106. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Nhà xuất bản Chính trị quốc gia, ed. 2006. *Luật Di sản văn hoá và văn bản hướng dẫn thi hành*. Hà Nội: Nhà xuất bản Chính trị quốc gia. 147p.
- Nông Quốc Chấn. 1976. Công việc của những người sưu tầm văn nghệ dân gian trong đất nước thống nhất. In *Để đẩy mạnh hoạt động văn nghệ dân gian: Kỷ yếu hội nghị bồi dưỡng kinh nghiệm sưu tầm văn nghệ dân gian toàn miền Bắc 9-1975*, edited by Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam, pp. 19-22. Thanh Hoá: Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam.
- Phạm Huy Thông. 1983. Văn hoá dân gian. *Văn hoá dân gian* số 2-1983: 46-49.
- Phan Đăng Nhật. 1999. Ban Văn hoá dân gian, tiền thân của Viện Nghiên cứu Văn hoá dân gian. *Văn hoá dân gian* số 4-1999: 12-16.
- Phan Huy Lê. 1979. Về bản chất của nền văn hoá truyền thống Việt Nam. *Tạp chí Cộng sản* số 11-1979: 65-68.
- Phong Lê. 2003. 50 năm Viện Văn học. In *Viện Văn học 50 năm xây dựng và phát triển (1953-2003)*, edited by Viện Văn học, pp. 9-70. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Tô Ngọc Thanh. 2001a. Lời mở. In *Một thế kỷ sưu tầm nghiên cứu văn hoá văn nghệ dân gian*, edited by Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam, pp. 11-14. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hoá-thông tin.
- . 2001b. Góp ý dự thảo di sản văn hoá. In *Hội thảo khoa học về Dự án Luật di sản văn hoá*, edited by Ủy ban Văn hoá, giáo dục, thanh niên, thiếu niên và nhi đồng, Quốc hội Khoá X, pp. 81-92. Hà Nội: Ủy ban Văn hoá, giáo dục, thanh niên, thiếu niên và nhi đồng của Quốc hội.
- . 2007a. 40 năm Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam. In *Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam 40 năm xây dựng và trưởng thành*, edited by Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam, pp. 17-30. Hà Nội: Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam.
- . 2007b. Nghệ nhân dân gian: tài sản vô giá của nền văn hoá Việt Nam. In *Nghệ nhân dân gian: Vietnam's living human treasures*, edited by Hội Văn nghệ dân gian Việt Nam, pp. 15-24. Hà Nội: Nhà

- xuất bản Khoa học xã hội.
- Tổ Văn học dân gian các dân tộc, ed. 1966. *Những ý kiến về văn học dân gian Việt Nam phát biểu trong Hội nghị sưu tập văn học dân gian toàn miền Bắc*. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học. 217p.
- Trà Linh. 1977. Một âm mưu nô dịch có hệ thống về văn hoá, văn nghệ của Mỹ-Ngụy. In *Văn hoá văn nghệ miền Nam dưới chế độ Mỹ Ngụy*, edited by Trà Linh, Phong Hiền, Trịnh Tuệ Quỳnh, Hoa Lục Bình, Thạch Phương and Trần Hữu Tá, pp. 11-49. Sài Gòn: Nhà xuất bản Văn hoá.
- Trần Quang Nhật. 1976. Những nét mới trong công tác văn nghệ dân gian mười năm qua. *Văn nghệ dân gian* số đặc biệt kỷ niệm 10 năm ngày thành lập Hội: 71-78.
- Trần Quốc Vượng. 1979. Cội nguồn và bản sắc của văn hoá Việt Nam. *Tạp chí Cộng sản* số 11-1979: 71-74.
- . 1990. Folklore Việt Nam: Trữ lượng và viễn cảnh. *Nghiên cứu Văn hoá nghệ thuật* số 5-1990: 76-78.
- Trịnh Đình Niên. 1992. Về việc sử dụng thuật ngữ “Văn hoá dân gian.” *Văn hoá dân gian* số 3-1992: 71-75.
- Trường Chinh. 1985. *Về văn hoá và nghệ thuật*. Tập 1. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn học.
- Ủy ban Văn hoá, giáo dục, thanh niên, thiếu niên và nhi đồng, Quốc hội Khoá X, ed. 2001. *Hội thảo khoa học về Dự án Luật Di sản Văn hoá*. Hà Nội: Ủy ban Văn hoá, giáo dục, thanh niên, thiếu niên và nhi đồng, Quốc hội Khoá X. 174p.
- Viện Sử học Việt Nam, ed. 1993. *Ban Văn Sử Địa*. Hà Nội: Viện Sử học Việt Nam. 150p.
- Viện Văn hoá dân gian, ed. 1990. *Quan niệm về Folklore*. Hà Nội: Nhà xuất bản khoa học xã hội. 148p.
- Viện Văn học, ed. 2004. *Nghiên cứu Văn-Sử-Địa: Những vấn đề lịch sử nghệ thuật*. Tập 2. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội. 1169p.
- Việt Nam Dân Chủ Cộng Hoà, Văn phòng Bộ Văn hoá, ed. 1974. *Công tác Văn hoá nghệ thuật trong những năm chống Mỹ cứu nước (1965-1972)*. Hà Nội: Văn phòng Bộ Văn hoá. 355p.
- Vũ Ngọc Khánh, ed. 1995. *Tự vùng thuật ngữ Folklore Việt Nam*. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hoá-thông tin.
- Vũ Ngọc Khánh; and Phạm Minh Thảo, ed. 2005. *Từ điển Việt Nam văn hoá tín ngưỡng phong tục*. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hoá-thông tin.
- Vũ Ngọc Phan. 1955. *Truyện cổ tích Việt Nam*. Hà Nội Ban Nghiên cứu Văn Sử Địa xuất bản.
- . 1966. Báo cáo về công tác sưu tập văn học dân gian tại Hội nghị sưu tập văn học dân gian toàn miền Bắc. In *Những ý kiến về văn học dân gian Việt Nam phát biểu trong Hội nghị sưu tập văn học dân gian toàn miền Bắc*, edited by Tổ Văn học dân gian các dân tộc, pp. 9-43. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học.
- . 1976. Mười năm hoạt động văn nghệ dân gian dưới sự lãnh đạo của Đảng. *Văn nghệ dân gian* số đặc biệt kỷ niệm 10 năm ngày thành lập của Hội: 22-31.
- . 2008 [1987]. Những năm tháng ấy. In *Vũ Ngọc Phan tuyển tập*, Tập IV, edited by Nhà xuất bản Văn học, pp. 202-524. Hà Nội: Nhà xuất bản Văn học.

新聞

Văn nghệ. 東京外国語大学附属図書館所蔵.

オンライン資料

文化体育観光省. <http://bvhttdl.gov.vn/vn/vb-qly-nn/2/1226/index.html> (最終アクセス 2014/6/5)

ベトナム社会科学翰林院. <http://www.vass.gov.vn/noidung/gioithieu/cocautochuc/Pages/thong-tin-don-vi.aspx?ItemID=111&PostID=60> (最終アクセス 2014/6/5)

ベトナム政府. http://vanban.chinhphu.vn/portal/page/portal/chinhphu/hethongvanban?class_id=1&mode=detail&document_id=174608 (最終アクセス 2014/7/13)

法務省. http://moj.gov.vn/vbqp/Lists/Vn%20bn%20php%20lut/View_Detail.aspx?ItemID=25591 (最終アクセス 2014/9/9)

『労働新聞』電子版. 2013.4.21. <http://laodong.com.vn/laodong-cuoi-tuan/phong-tang-nghe-nhan-nhan-dan-nghe-nhan-uu-tu-lai-vuong-xin-cho-111835.bld> (最終アクセス 2014/6/5)

(2014 年 10 月 2 日 掲載決定)